筑波大学　先史学・考古学研究　第20号　21～50　2009

論文

イスラエル国シャロン平野の鉄器時代Ⅰ期
－テル・ゼロール出土資料を視点に－

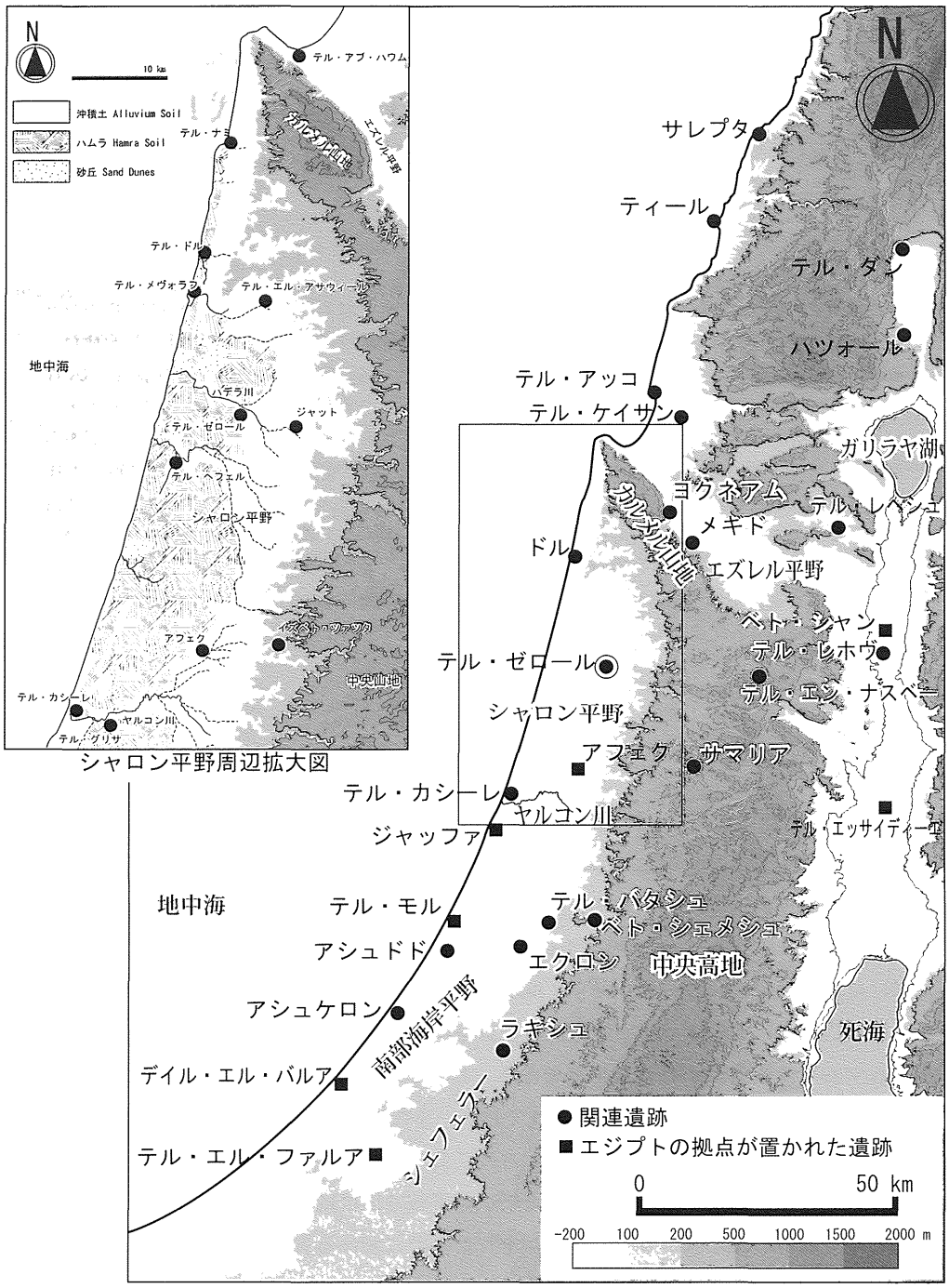
小野塚 拓造

鉄器時代Ⅰ期のシャロン平野は「海の民」に属する集団の領域に属していたと考えられている。この視点は最近の考古学的研究の中にも受け継がれており，少数の出土物を取り上げて，シャロン平野と「海の民」との関係を論じる研究が行われてきた。一方で，鉄器時代Ⅰ期におけるシャロン平野の物質文化の特徴を総合的に理解しようとする考古学的研究も進展し始めている。そこで本論は，シャロン平野中央部に位置し，後期青銅器時代から鉄器時代Ⅰ期にかけて継続して居住された遺跡であるテル・ゼロールの出土土器を材料とし，鉄器時代Ⅰ期のシャロン平野について検討した。出土土器を検討した結果，後期青銅器時代末から鉄器時代IA期にかけてのテル・ゼロールはエジプト新王国の支配下に置かれていた可能性が高いことが明らかとなった。またエジプト撤退後の鉄器時代IB期の物質文化は，部分的にミケーネ文化の要素を含むが，基本的には後期青銅器時代の系譜を受け継ぐものであり，ファニキアの地域と同じような傾向にあったといえる。本論はその背景についても若干の考察を行った。

Ⅰ．はじめに

最初に，本論の地理的背景と時代背景を簡単に紹介したい。対象地域である南レヴァントは，地中海東岸に沿って平野が南北に広がり，内陸に入るとシェフェラー（shephelah）と呼ばれる丘陵地や中央高地が南北に展開している（第1図）。また中央高地の東側には，海抜下400メートルに達するヨルダン渓谷が南北に走っている。本論で論じるシャロン（Sharon）平野は地中海沿岸に位置し，現在のテル・アヴィヴ（Tel Aviv）市の北限を流れるヤルコン（Yarkon）川から，カルメル（Carmel）山地までの平地である。シャロン平野は，東側の山地を水源とする複数の川が流れており，水資源が豊富な平野である。しかし，その大部分はハムラ（Hamra）と呼ばれる酸性の赤色土（red loam）で構成されており，また海岸付近には砂丘が存在する。ハムラに覆われた地域は，農耕に不向きであり，古代においては樫やピスタチオの森林となっていたようだ(Karmon 1971)。穀物の耕作に適した肥沃な平地は川に沿った地域と，平野の東側の地域，すなわち中央高地の麓に広がっている。シャロン平野における古代の遺跡も，ハムラ地帯を避けるように，川沿いや東側に分布している。

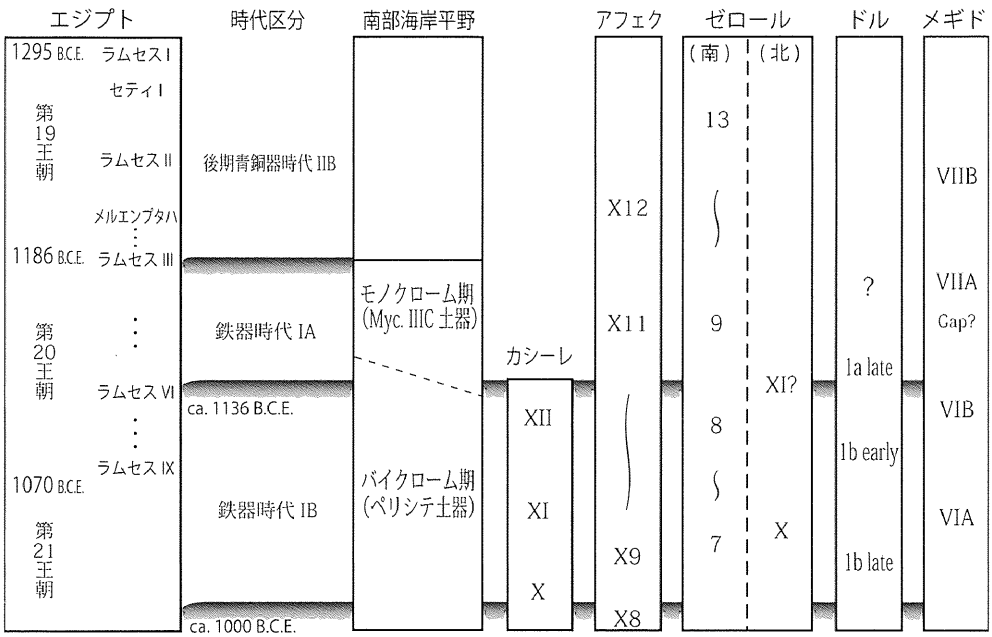
鉄器時代Ⅰ期は前1200年頃から前1000年頃に相当し[1]，南レヴァントにおいては，後期青銅器時代のカナン人（Canaanite）の都市国家から，イスラエル王国という領域国家が形成されるまでの過渡期に相当する。本論では鉄器時代Ⅰ期を，イスラエル考古学の一般的な概説書（Mazar 1990）にならい，前1136年頃[2]を境に二期に区分し，前半を鉄器時代IA期，後半を



第 1 図 関連遺跡地図

IB 期と呼ぶことにする。カナン文化などと呼ばれる後期青銅器時代の物質文化は，南レヴァント全域を通して比較的均質であったが，鉄器時代 I 期に入り，地域性の強い物質文化が生まれる。例えば，南部海岸平野ではミケーネ的文化を携えた集団の大規模な移住があり，ミケー

ネ文化の影響を受けた物質文化を特徴とする地域が現れ，ペリシテ人の入植と考えられている（Dothan, T. 1982, Dothan and Dothan 1992）。また中央高地では，古代イスラエル人に関連づけられる物質文化のパターンの存在が指摘されている（Finkelstein 1998, Faust 2006）。このような物質文化の地域性に関する考古学的研究と，その歴史的位置づけは，「聖書考古学」として発展してきた南レヴァント考古学の主要なテーマでもあった。この中で，鉄器時代Ⅰ期のシャロン平野に関する考古学的考察は，他の地域に比べると十分になされていない。発掘された遺跡がきちんと報告されていないこともあり，後期青銅器時代から鉄器時代Ⅰ期にかけて，物質文化にどのような特徴が現れ，それがどのような変遷を辿るのかといったことは，先行研究においては明確に示されていない。本論は，シャロン平野のほぼ中央部に位置し，後期青銅器時代から鉄器時代Ⅰ期にかけての連続した層位が検出されているテル・ゼロール（Tel Zeror）の出土資料を再検討することで，この地域の鉄器時代Ⅰ期の歴史に新たな知見を加えるものである。



第２図　関連遺跡の層位表

Ⅱ．　鉄器時代Ⅰ期のシャロン平野に関する先行研究

1．歴史的研究が示すシキラ人の定着と考古資料の解釈

鉄器時代Ⅰ期のシャロン平野には，「海の民」（“Sea Peoples”）の一派であるシキラ（Sikila）人が定着したと考えられてきた（後述）。「海の民」とは，エジプト新王国時代の碑文などに見られる複数の民族集団の総称であり，一部の民族はアマルナ文書や，有名な「カデシュの戦い」のレリーフにも登場する。ルクソール（Luxor）のメディネト・ハブ（Medinet Habu）神殿のレリーフや，ハリスパピルス（Harris Papyrus）Ⅰといった史料は，「海の民」が，ラムセス３

世の治世第8年（前1175年頃）に，エーゲ海，キリキア（Cilicia）から移動を開始し，キプロス島やレヴァント沿岸部を席巻しながらエジプトに侵入したことを伝えている。ラムセス3世は，激戦の末に「海の民」の撃退に成功するが，この戦いの前後に，「海の民」の一派のペレセト（Peleset）が南レヴァントの南部海岸平野に定着したと考えられている。ペレセトは旧約聖書が描くペリシテ人と同一の民族集団とされ，実際に，ペリシテ人の中心都市として旧約聖書に描かれているアシュドド（Ashdod），エクロン（Ekron），アシュケロン（Ashkelon）といった遺跡の発掘調査では，ミケーネ様式の物質文化を携えた集団による植民があったことを示す痕跡が出土している。「海の民」の到来を考古学資料から明確に復元できるのはペリシテ人の事例だけであるが，これに類するような動きは，前1200年頃の東地中海各地で起こっていたと考えられており[3]，シャロン平野においてはシキラ（Šikila）と呼ばれる集団が定着したと考えられている[4]。ウガリトで出土したヒッタイト王の書簡（RS 34.129）は，舟を住処とするシキラが沿岸の村々を略奪する様子を伝えている。この文書は前1187-1185年頃のものとされ，シキラ人がペリシテ人などと共にエジプトに侵入する直前の動向を描写したものとされる（Stager 1995: p. 337）。シャロン平野にシキラ人が定住したという説は，2つの文献史料に依拠している。エジプト第20王朝後半の文献史料と考えられている『アメン・オペの地名録』と，第20王朝末期から第21王朝初頭の作品とされる『ウェン・アモンの旅行記』である。『ウェン・アモンの旅行記』は，テーベのアモン大神殿の神官ウェン・アモンが杉材を買いつけるためにビブロス（Byblos）まで赴く道中を描いた作品である。地中海に出たウェン・アモンの寄港地となったのがシャロン平野北部のドル（Dor）で，この町がシキラ人によって支配されている様子が描かれている。また，物語によるとシキラの船隊の活動範囲はビブロスにまで及んでおり，当時のドルの繁栄を示唆していると考えられる。『ウェン・アモンの旅行記』からは，少なくとも「シキラ」と呼ばれる人々がドルを支配していたという認識を，当時のエジプト人が持っていたことが分かる（宮崎 2003：62頁）。1960年代に発掘調査が行われたテル・ゼロールの居住史は，こうした背景の中で解釈されることとなった。この調査でペリシテ人の遺跡に特徴的な遺物[5]が出土したことから，ドルから遠くないテル・ゼロールにも「海の民」に属する集団が居住していたことが想定され，ドルを拠点とするシキラ人がシャロン平野へと進出したという状況が復元された（Ohata 1970: pp. 17-18, pp. 39-40, Kochavi 1993: pp. 1526, Dothan, T. 1982: p. 296）。

シャロン平野の北に位置するアッコ（Acco）平野においても，似たような歴史が復元されている。テル・アッコ（Tel Acco）の発掘調査では後期青銅器時代末の破壊層からミケーネIIIC式土器が出土し，発掘者のM・ドタンはこれをアッコ平野に定着した「海の民」のシェルデン人の痕跡であると考えた（M. Dothan 1989: pp. 60-65）。この見解は『アメン・オペの地名録』の中で，シェルデン，シキラ，ペリシテという3つの民族集団が地理的な順序で列挙されていることを想定し，シェルデンの定着地を，ペリシテが定着した南部海岸平野およびシキラが支配したドル周辺よりも北に求めたことによる。このように，文献史料が伝える情報と断

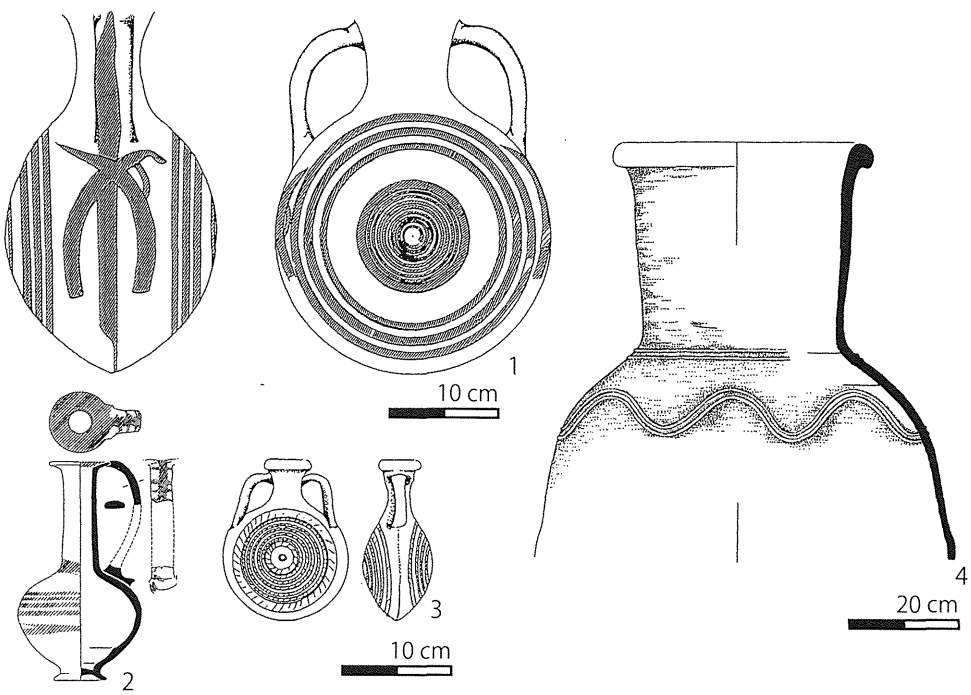
片的な考古資料を組み合わせることで，イスラエル北部の沿岸地域においては，シキラ人がシャロン平野に，シェルデン人がアッコ平野に定着したと考えられ，最近の研究にも受け継がれている（Dothan and Dothan 1993: pp. 209-215, Singer 1994: pp. 285-288, Stager 1995: pp. 336-368, Stern 2000, Redford 2007: p. 443）。

一方で，シャロン平野やアッコ平野に「海の民」が定着したという主張を，批判的な立場から再検討する研究も見受けられる。例えば，ブルダエヴィッチ（Burdajewicz）はアッコ平野の代表的な遺跡であるテル・ケイサン（Tell Keisan）と，ペリシテ文化に属するテル・カシーレ（Tell Qasile）の土器を比較し，一部の日用土器（plain ware）[6] に類似点を見出せることから，テル・ケイサンと南部海岸平野（おそらくテル・カシーレ）に交流があったことを主張し，テル・ケイサンやその他の遺跡で出土する「ペリシテ土器」は，「海の民」の存在を示すものではなく，先住のカナン人によって，入手困難となったミケーネ土器やキプロス土器の代用品として消費されていたものであろうという見解を提示している（Burdajewicz 1994: pp. 153-161）。また宮崎はテル・ゼロールから出土した「海の民」と関連づけられる遺物[7] の大部分は，必ずしもミケーネ文化に起源があるわけではなく，わずかに出土した「ペリシテ土器」を根拠に「海の民」がテル・ゼロールに進出したとする従来の説を退けた。そして南部海岸平野以外の遺跡で出土する「ペリシテ土器」は，その遺跡の人口構成とは無関係で，物品の流通によって南部海岸平野から運ばれたものとして捉えるべきであると述べている（宮崎 2003: 75 頁）。

2. ドルの発掘成果と新たな視点

ドルの発掘調査が進展し，出土資料が蓄積すると，断片的な出土物だけでなく，出土物全体の特徴や傾向から，シキル人が居住していたとされるドルの物質文化を論じることが可能となった[8]。ギルボア（Gilboa）はドルの鉄器時代 IA 期後半（「Iron 1a late」層）の土器を提示し，そのほとんどが後期青銅器時代の伝統に即した土器であるということを論じている（Gilboa 2001b）[9]。この研究は，シキル人が居住したドルの物質文化が，ペリシテ人が定着し，ミケーネ IIIC 式に属するモノクローム土器が大量に生産され，次第にペリシテ土器と呼ばれるバイクローム土器を発展させた南部海岸平野とは，まったく異なった性格を持っていたことを明示した点で重要である（Gilboa 2001b: pp. 444-448, Gilboa 2005: pp. 63-67）。またギルボアは，ドルやテル・ケイサンといったイスラエル北部沿岸地域に位置する遺跡の鉄器時代Ⅰ期層に見られる特徴的な現象として，ベル形（ミケーネ様式）のスキュフォス[10] と，キプロスとの交流を示す土器の存在を挙げている。スキュフォスは，ペリシテ人が生産したミケーネ IIIC 式モノムローム土器（Dothan and Zukerman 2004）と，それが発展したバイクローム土器の代表的な器形であった[11]。そのために，南部海岸平野以外の地域で出土するスキュフォスも，報告書や論文の中で「ペリシテ土器」として扱われることが多かった。しかし，ドルで出土したスキュフォスの胎土分析を行った結果，それらの中には南部海岸平野から搬入されたものもあるが，大部分はドル周辺かガリラヤ地方で生産されたものであることが判明している（Gilboa

2005: pp. 56-57, Gilboa, Cohen-Weinberger and Goren 2006)。こうした調査によって，南部海岸平野以外の地域で出土するスキュフォスを南部海岸平野からもたらされた「ペリシテ土器」として説明する諸研究の不適切さが浮き彫りとなった。また，スキュフォスは後期青銅器時代末から鉄器時代への移行期に，レヴァント沿岸部に広く分布するようになった器形である[12]。この分布状況は，エーゲ海風の飲食習慣（饗宴のようなもの）が，東地中海の各地で受容された結果であると考えられている。そこで，ドルやテル・ケイサンで出土するスキュフォスもペリシテの影響と考えるよりも，むしろ，シリアおよびレバノン沿岸部の遺跡に共通して見られる現象の一端として捉えることができる（Gilboa 2001b)。さらに注目すべき要素として，ギルボアはドルとテル・ケイサンではキプロスから輸入された土器と，キプロス土器の模倣品が出土していることを挙げている。それらは，キプロス式渦巻き文を持つフラスコ（第3図：1, 3）[13], キプロス様式の高台付水差し（第3図：2), キプロス式ピトス[14]（第3図：4）などで（Gilboa 2005)，特にキプロス式ピトスは南レヴァントに渡来してきたキプロスの土器職人によって生産されたものと考えられている（Gilboa 2001a, 2001b)。キプロスとの交流を示すこのような土器は，南部海岸平野ではほとんど出土しておらず[15]，ドルやテル・ケイサンに特徴的な要素となっている。こうした研究をもとに，鉄器時代I期のドルの土器文化を端的に述べると，「後期青銅器時代のカナン文化が色濃く継承され，さらにキプロスとの交流を示す要素が特徴的に存在する」という内容になるだろう。これは，我々が「フェニキア」として認識しているレバノン沿岸部の遺跡の物質文化と重なるものであり，シャロン平野北部もその領域に属していた可能性を考慮しなければならない。



第3図　キプロス土器の模倣品

3. シャロン平野南部で見られるペリシテ人の進出

次にシャロン平野南部のヤルコン川周辺に関する最近の考古学的研究を確認したい。鉄器時代Ⅰ期以前のヤルコン川周辺は，エジプトが重点的に支配していた地域であった。例えば，ジャッファ（Jaffa）にはエジプトの要塞が存在し，ラムセス2世時代の城門などが発掘されている（Herzog 2008）。またヤルコン川の上流に位置し，シャロン平野南部の中心的な遺跡であるテル・アフェク（Tel Aphek）では，「エジプト総督居館」（Egyptian Residency）と呼ばれる正方形の強固な建造物が出土している。同型の建造物は，南レヴァントの9遺跡で知られており，エジプトの活動拠点としての何らかの役割を担っていたと考えられている。実際にテル・アフェクの「エジプト総督居館」では，エジプトの役人に宛てられたウガリトからの書簡が出土しており（Owen 1981, Singer 1983），エジプトの行政官が駐在していたことが分かっている。エジプトがヤルコン川周辺から撤退したのは，第19王朝末期から第20王朝初頭だと考えられる。特にテル・アフェクの「エジプト総督居館」が破壊された時期については，前述した書簡から，前13世紀末という厳密な年代が与えられており，後期青銅器時代から鉄器時代への移行を考察する際の指標となっている（Beck and Kochavi 1985）。鉄器時代Ⅰ期に入ると，シャロン平野南部を取り囲む地域において，居住遺跡の増加が認められるようになる[16]。このうち，ヤルコン川流域のテル・カシーレやアゾール（Azor），テル・グリサ（Tel Gerisa）の出土物は，南部海岸平野に定着したペリシテの影響を色濃く示している（Dothan, T. 1982: pp. 54-69）。特にテル・カシーレでは，ペリシテ土器の文化要素に土着の文化要素が入り混じった革新的ともいえる物質文化が報告されている[17]。一方で，シャロン平野の東側に位置する中央高地のへりには，イズベト・ツァルタ（Izbet Sartah）などの集落が出現する。これらは，この時期に定住化した古代イスラエル人の集落と考えられている（Finkelstein 1986, 1988: pp. 73-80）。鉄器時代Ⅰ期のシャロン平野南部は，山地のへりに定住したイスラエル人の居住地と，ペリシテの進出が認められるヤルコン川流域との中間に位置していたことになる。エジプトの活動拠点が破壊された後のテル・アフェク（X11-X9層）は，小規模な家屋，脱穀場，ピットといった遺構に特徴づけられる集落となった。ガドット（Gadot）は，南部海岸平野に特徴的な土器や，ペリシテ系統の言語が刻まれた粘土板，アシュドダ（Ashdoda）と呼ばれる土偶が出土していることを根拠に，この時期のテル・アフェクは，ペリシテの本拠地（おそらくアシュケロン）との経済的つながりを持った集落であったとしている。つまり鉄器時代Ⅰ期のテル・アフェクは，周囲に広がる肥沃な農耕地で収穫される穀物を収集し，イズベト・ツァルタのような山地の集落と交易を行うためのペリシテの前線拠点として位置付けられている（Gadot 2006）。このように，エジプト撤退後のシャロン平野南部では，ペリシテ文化の波及が確認されている。

4. 問題の所在と本研究の目的

シャロン平野北部に関しては，ドルの物質文化が南部海岸平野に定着したペリシテの物質文化とは別の性格を有し，むしろ，「フェニキア」として認識される文化に近いということが

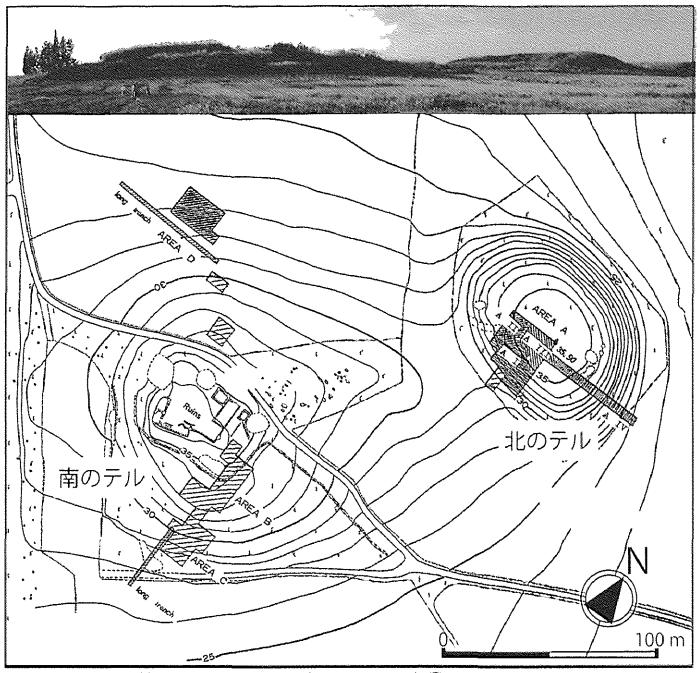
分かってきた。一方，ガドットによってペリシテ文化がシャロン平野の南部にまで及んでいたことが提示されている。ここで問題となるのが，これら二つの文化の境界である。ギルボアは，ドルやテル・ケイサンに見られるイスラエル北部沿岸地域の物質文化（フェニキア文化）と，南部海岸平野のペリシテ文化との境界がシャロン平野のどこかに存在した可能性を指摘しているが（Gilboa 2001b），それ以上の検討はなされていない。また，ドルの発掘調査は後期青銅器時代層を解明するには至っておらず，後期青銅器時代から鉄器時代 I 期への移行期（鉄器時代 IA 期）を示す層位が明確に検出されていない。したがって，ドルで確認された「フェニキア」と捉えられる物質文化がどのような状況で成立したのかという問題も未解決である。また，その物質文化が，シャロン平野の中央部や東部へ波及していたかどうかも検証されるべき課題である。ところが，こうした問題を考察するための考古資料は非常に乏しい。シャロン平野の中央部に，後期青銅器時代の地域的センターであったと考えられるテル・ジャット（Tel Jatt[18]）があるが，ここでは限定的な試掘調査と，後期青銅器時代墓の調査が行われただけで（Yannai 2000），本格的な発掘調査は行われていない。テル・ヘフェル（Tel Hefer）では後期青銅器時代および鉄器時代 I 期の痕跡が確認されているが，その資料はとても限定的であり，そこからシャロン平野の文化的特徴を論じるのは困難である。テル・ポレグ（Tel Poreg）やテル・ミハル（Tel Michal）では後期青銅器時代から鉄器時代 I 期にかけての居住がなかったようである。こうした資料不足を埋めるために重要となるのが，テル・ゼロールの再検討である。テル・ゼロールはシャロン平野のほぼ中央に位置し，日本オリエント学会によって 1964-1966 年，1974 年に発掘調査が行われ，後期青銅器時代末から鉄器時代 I 期へと連続する層位も検出されている。1-3 次調査までの成果は報告書として刊行されているが（Ohata 1966, 1967, 1970），これらはいわゆる予備報告に相当するもので，検出した遺構の報告，出土物の検討，各層位の歴史的位置づけなどが不十分である。また大部分の出土物と，1974 年の第 4 次調査の成果はほとんど報告されていない。そこで本論は，後期青銅器時代から鉄器時代 I 期のテル・ゼロールの再検討を行う。未発表の出土資料を提示し，先にあげた問題を考察することで，鉄器時代 I 期のシャロン平野の歴史理解を深めたい。

Ⅲ．後期青銅器時代ⅡB 期から鉄器時代 I 期のテル・ゼロール

1．後期青銅器時代後半のテル・ゼロール

本論の主題である後期青銅器時代から鉄器時代 I 期への移行期を検討する前に，テル・ゼロールの後期青銅器時代の様相に触れておきたい。テル・ゼロールはシャロン平野のハデラ（Hadera）川の傍らに位置し，やや小高い「北のテル」と，なだらかな「南のテル」の 2 つの遺跡丘[19]からなる遺跡である（第 4 図）。また付近からは墓域も見つかっている。中期青銅器時代の居住が途絶えたのち，テル・ゼロールは 100 年ほど放棄されていたが，後期青銅器時代 I 期末 -II 期初頭に，新しい住民がやってきた。発掘調査の結果，彼らは大規模な造成工事によって南のテルにテラスを築き，そこに青銅産業に携わる工房を建設したことが明らかになって

いる[20]。銅の精錬には大量の燃料が必要であるが，テル・ゼロールの住民たちは，シャロン平野の森林資源を利用して木炭を製造することができた。テル・ゼロールでは，この工房を中心に，青銅関連の産業が150年ほど続いたと考えられる（小川 1989: 121頁）。この工房址からは，地元で生産された土器に混ざって，キプロス土器が豊富に出土した。このことから，小川は後期青銅器時代のテル・ゼロールは銅の供給地であったキプロスと何らかの関連があったことを指摘している。すなわち，テル・ゼロールは，キプロス系工人が技術とインゴットを持ち込み，最終精錬をした海外拠点であったという可能性である（小川 1989: 123-124頁）。この青銅産業址は，おそらく南のテル17-14層に属し，後期青銅器時代IIA期に相当すると考えられる。



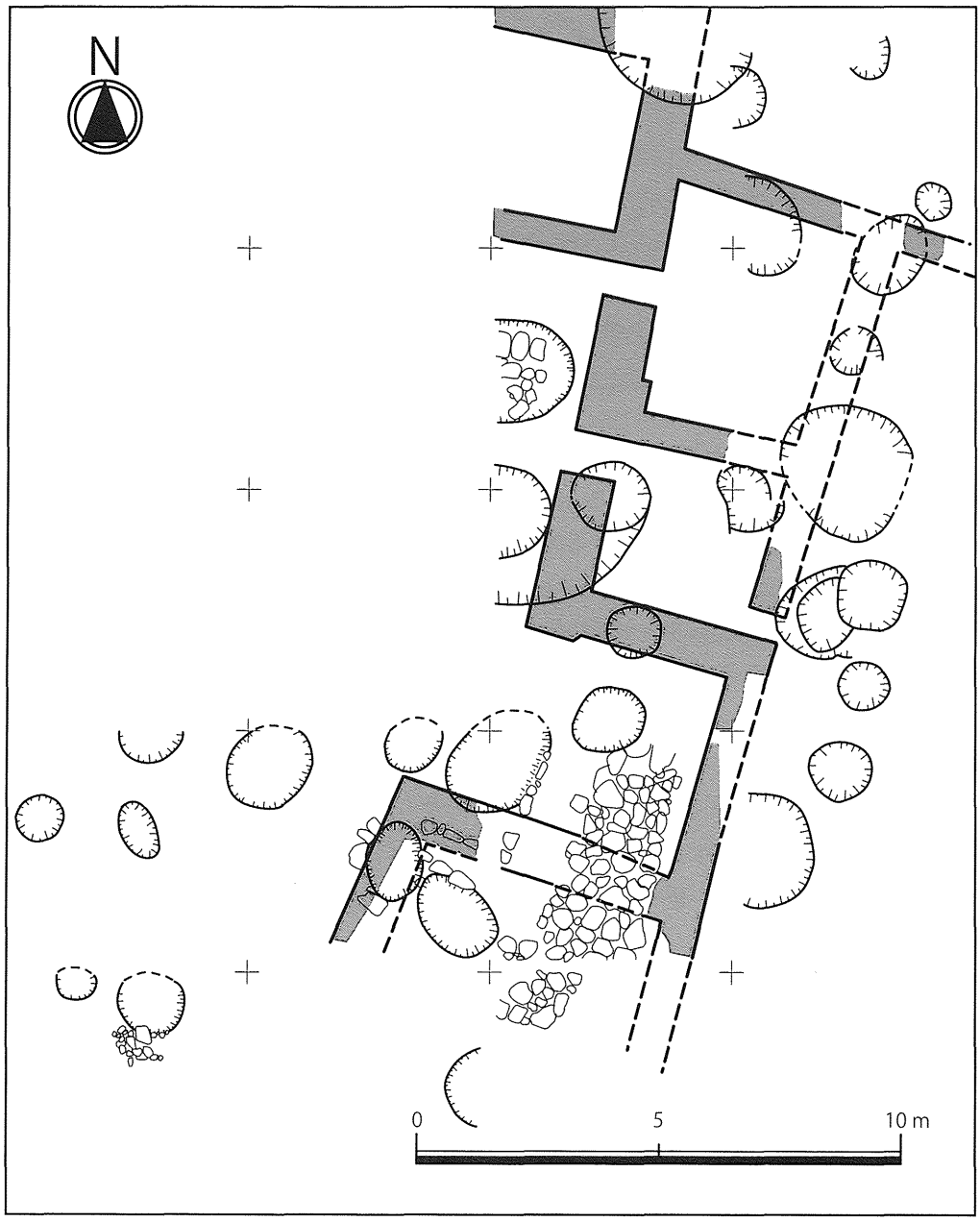
第4図　テル・ゼロールの遠景と地形図

青銅産業址の上層には，後期青銅器時代IIB期および鉄器時代IA期と考えられる遺構（13-9層）が存在しているが，そこからは青銅産業を示す痕跡が出土しなかった（小川 1989: 123頁）。このことから，小川は，後期青銅器時代末には，テル・ゼロールから青銅産業は姿を消していたと結論づけているが，13-9層に関するそれ以上の考察はなされていない。検出された遺構や出土物も，予備報告の中で断片的に記述されているだけで，この時期のテル・ゼロールがどのような性格の居住地であったのかは未解明である。そこで，13-9層に相当する遺構と土器を以下で取りあげ，その傾向を検討したい。

2. 南のテル13-9層の遺構

テル・ゼロールでは各地区で後期青銅器時代の痕跡が確認されているが（AIV地区，B地区，C地区，D地区，E地区），後期青銅器時代IIA期から鉄器時代にかけての居住が層位的に検出されているのは，南のテルのB・C地区（13-9層）だけである。その他の地区では，テルの裾部に設けられた調査区画から後期青銅器時代の遺構・遺物が出土したが，それらには前後関係がなく，詳細な時期や，物質文化の経時的な変化をとらえることができない。そこで本論はB・C地区の出土資料を材料として議論を進める。

後期青銅器時代 II および鉄器時代鉄器時代 IA 期に相当する主な遺構は，C 地区で検出された大型建物[21]（第 5 図）と，それに付属する炉跡および窯跡である。調査区の範囲から，大型建物の全容は明らかではないが，この遺構が壁によって仕切られたいくつもの小部屋を有する建物であったことは間違いない。遺構との関連が明確な遺物が少ないため，この建物の性格を出土物から推察することは困難であるが，遺構の規模とプランから判断すると，少なくとも一般住居ではなく，公共性を帯びた建造物であったと考えられる。付近で検出された窯址は土



第 5 図　テル・ゼロール「南のテル」13-7 層の平面図

器焼成用と推定されているが（Ohata 1966: pp. 45-46），その構造やサイズは典型的な土器焼成窯と異なっている[22]。また内部から土器片が1点も見つかっていない。したがって，この窯が土器焼成用であったとは考えにくい。イラン（Iran）が指摘しているように，この窯は，金属加工用の溶鉱炉であったかもしれない（Iran 1999: pp. 220-222）。その場合，後期青銅器時代IIA期以来の青銅産業がその後も続いていたことを意味する。

大型建物の直上には，建物が火災を伴う破壊によって滅んだことを示す灰層が堆積していた。この破壊の時期は厳密には特定できないが，破壊層には後期青銅器時代の土器とともにペリシテ土器など鉄器時代IB期に特徴的な土器を含んでおり，破壊の時期が鉄器時代Ⅰ期初頭であったことが推測される。北のテルのA地区からは，9層と同時期（後期青銅器時代IIB期）のものと考えられる周壁と，その上部からエジプト第20王朝時代のスカラベが出土している（Ohata 1966: pp. 45-47）。このようなことを合わせて考えると，南のテル9層の大型建物も鉄器時代IA期まで健在であったと考えるほうが妥当であろう。

3. 南のテル13-9層の土器

［鉢 / 皿形土器］

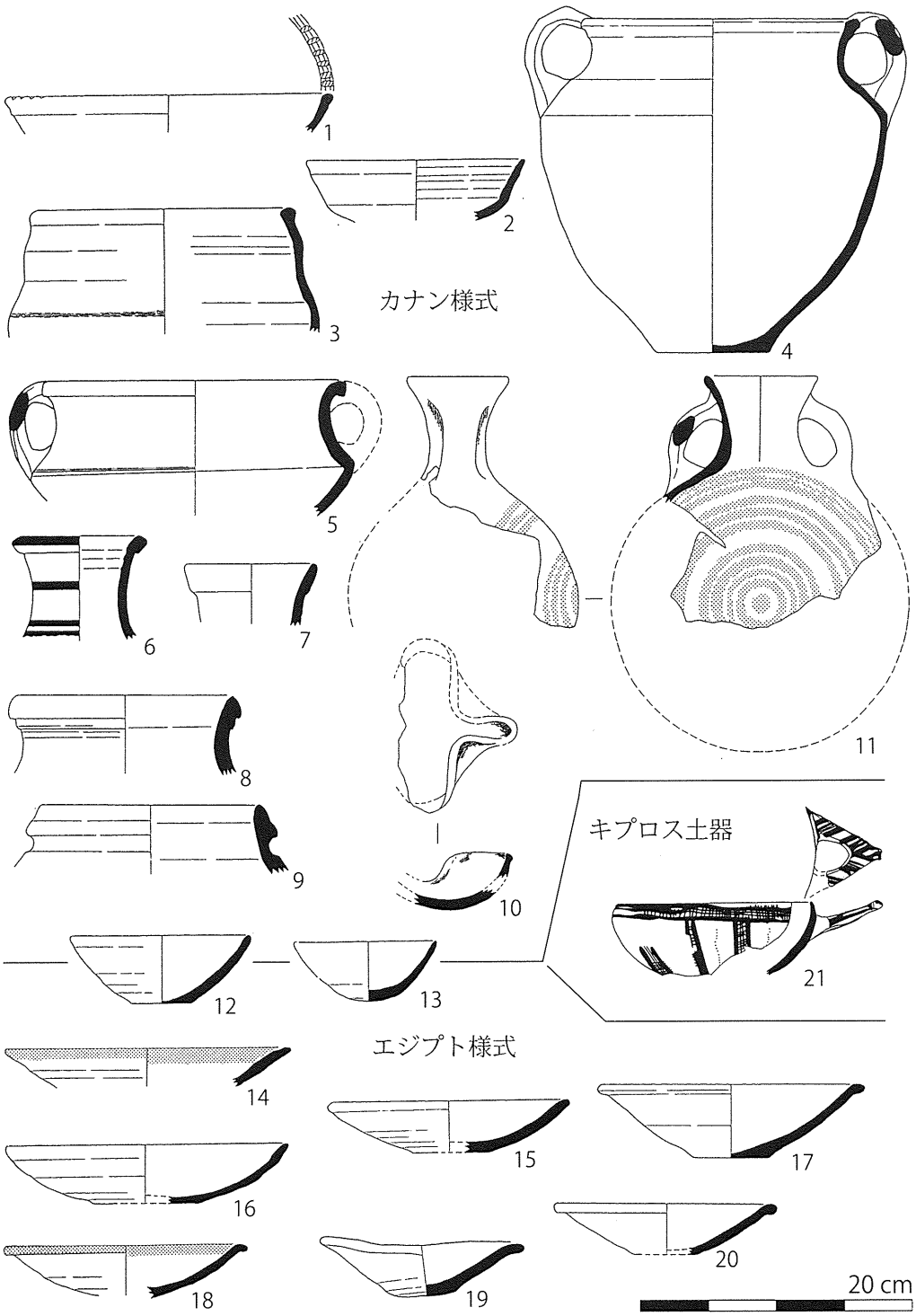
テル・ゼロールで出土した後期青銅器時代IIB期（13-9層）の鉢形土器は以下の3型式に分類することができる。

(1) BL 1型 胴部が湾曲している鉢型土器（Rounded Bowl）

(2) BL 2型 屈曲部がある鉢形土器（Carinated Bowl）

(3) BL 3型 エジプト様式の皿形土器（Egyptian-style Bowl）

BL 1型はシンプルな口縁部を持つ鉢形土器で，大抵は底部に高台が取り付けられる。これは後期青銅器時代の南レヴァントでは標準的な型式で，様々な遺跡の後期青銅器時代層で類例を見ることができる。テル・ゼロール出土の13-9層では，第6図：1のように口唇部に沿って文様が描かれるものが出土している。BL2型（第6図：2）は胴部に屈曲がある鉢形土器で，これも後期青銅器時代の南レヴァントに広く類例を見ることができる。BL1型と同様，口縁部はシンプルで，底部には大抵，高台が取り付けられる。BL3型（第6図：14-20）は，新王国時代や第3中間期のエジプトに見られる典型的な土器型式の1つであり[23]，南レヴァントにおいても，エジプトの活動拠点が置かれていた遺跡から出土している（Barako 2007: 134-138）。この型式の特徴は，口縁部に向かって真っすぐに伸びるか，やや湾曲しながら立ち上る器壁と，緩やかな丸底か平底を呈する底部である。特に，高台が取り付けられない底部は，土着の型式（BL 1型とBL 2型）と対照的である。テル・ゼロール13-9層で出土したBL 3型は，口縁部の形状に注目にすると，口縁部の形に加工がないもの（第6図：14-16）と，外側に向かって水平方向に折り返されているもの（第6図：17-20）と，2種類に分類することができる。双方とも，エジプト本土および，エジプトの活動拠点があったとされる南レヴァントの遺跡で出土する型式である。第6図：12-13はBL 1型の中でも高台がつかないもので，南レヴァントとエジプト



第 6 図 テル・ゼロール 13-9 層の出土土器

の双方で見ることができる型式である。南レヴァントではティール(Tyre), ハツォール(Hazor), メギド（Megiddo），アシュドドといった遺跡の後期青銅器時代層に類例がある[24]。

［クラテール］第6図：3-5

胴部のやや高い位置に屈曲部を有するクラテール（KR 1型）が出土している（第6図：3-5）。この型式は，後期青銅器時代の南レヴァントでは一般的であり，さらに鉄器時代へと継続する型式である。テル・ゼロールの後期青銅器時代IIB層では，やや厚くなるように成形された口縁部が垂直に立つものや，やや外側に開くもの（第6図：4-5）が見られる。第6図：3は屈曲部が比較的低い位置にあるクラテールのようだ。

［フラスコ・貯蔵壺・ピトス・ランプ］

第6図：6-7は貯蔵壺の頸部である。カナン式アンフォラ（Canaanite Amphora）と呼ばれる，後期青銅器時代の代表的な貯蔵壺は，頸部の長さや口縁部の形状にヴァリエーションがあるが，第6図：6-7は長頸の壺であるようだ。第6図：8-9はピトスの口縁部である。

［搬入土器］

後期青銅器時代には，キプロス土器やミケーネ土器が交易によって東地中海の各地域に運ばれていたことが知られている。テル・ゼロールでは，多数のキプロス土器が青銅産業の工房（17-14層）と関連して出土していることが既に指摘されているが（Ohata1967: p. 50, 小川1989: 123頁）[25]，13-9層では，ホワイト・スリップII土器（White Slip II Ware，通称ミルク・ボウル）が13層から1点出土しているだけである（第6図：21）。12-9層ではキプロス土器が確認されていない。

以上が，テル・ゼロールの13-9層から出土した土器の概要である。これらの土器は，第6図が示すように，(1) 後期青銅器時代の南レヴァントに一般的な型式で土着の土器文化を示すカナン様式，(2) エジプトの土器に特徴的な型式をもつエジプト様式，(3) キプロス土器，の3つのグループに分けて捉えることができる（第11図も参照）。その中で，エジプト様式の土器群が存在していることは重要な意味を持つ。それは，以下で述べるように，この時期のテル・ゼロールがエジプトの影響下に置かれていたことを示すからである。

エジプト新王国によるレヴァント地方の支配は第19王朝・第20王朝期に強化された。その痕跡は考古資料の中にも表れるようになる。例えば，1章で言及した「エジプト総督居館」と呼ばれる建造物が通商上の要地に築かれるのもこの時期である。「エジプト総督居館」が置かれていた町が実際にどのような役割を担っていたのかは明確ではないが，少なくとも，ベト・シャン（Beth Shean）は，南レヴァントにおける最も重要な拠点の一つで，知事や軍隊が駐屯していたと考えられている[26]。また，前述したように，アフェクの「エジプト総督居館」にも行政官が駐在していたことが判明している。「エジプト総督居館」は他に，デイル・エル・バルア（Deir el-Balah），テル・モル（Tel Mor），テル・エル・ファルア（Tell el-Far'ah）南，テル・エッ・サイディエ（Tell es-Sa'idiyeh）といった遺跡で出土しているが，これらの遺跡も同様にエジプトの活動拠点であったと考えられる。さらに，最近出版された報告や研究によっ

て，「エジプト総督居館」が出土した遺跡の物質文化には，周辺遺跡には見られない特徴が含まれていることが明らかになりつつある（Gadot 2006, Mazar (ed.) 2006, Mazar and Mullins 2007, Barako 2007）。それは，土着の型式の土器に混じって，まとまった量のエジプト様式の土器群が検出されることである。例えば，ベト・シャン Q2-1 層では，エジプト様式の土器が出土土器全体の 70% 以上を占める（Mazar (ed.) 2006: 129）。テル・アフェク X-12 層では出土土器の約 35%（Gadot 2003: fig. V.5），テル・モル VI-V 層では出土土器の 13%（Barako 2007: p. 150）がエジプト様式の土器群である。これに対し，「エジプト総督居館」が検出されていない遺跡では，基本的にエジプト様式の土器は出土しない。例外的に，メギド，テル・ケイサン，ラキシュ（Lachish），テル・レヘシュ（Tel Rekhesh）からは BL 3 型に該当する土器が 1-3 点出土し[27]，ハツォール，カミド・エル・ロズ（Kamid el-Lôz）からはエジプト様式の壺形土器が数点出土しているが[28]，これらは報告されている土器全体から見れば 1% にも満たない量である。筆者が把握している限りでは，これら 5 遺跡以外の遺跡ではエジプト様式の土器は報告されていない。このようにエジプト様式の土器群は，「エジプト総督居館」が置かれた遺跡以外には，ほとんど流通しなかったようだ。この現象は極めて明確なものである。例えば，テル・レホヴ（Tel Rehov）では，エジプト様式の土器が大量に出土するベト・シャンから 5 km ほどしか離れていないにもかかわらず，エジプト様式の土器が稀にしか出土しないことが知られている。同様の現象は鉄器時代 IA 期の南部海岸平野でも知られている。テル・モル，テル・セラ（Tel Sera'），テル・エル・ファルア南は「エジプト総督居館」が置かれ，エジプトの支配下にあったと考えられるが，そこから出土するエジプト様式の土器は，付近にあったペリシテ人の都市には全く分布していない[29]。

このように，南レヴァントにおけるエジプト様式の土器群は，「エジプト総督居館」が存在した遺跡，つまりエジプトが活動拠点を置いていた遺跡においてのみ，まとまった量で出土するという明確な傾向を示している。換言すれば，エジプト様式の土器群がまとまった量で出土する遺跡は，エジプトの活動拠点であった可能性が高いと考えることができる。それでは，テル・ゼロールで出土したエジプト様式の土器群はどのように捉えるべきであろうか。南のテルの 13-9 層で出土した土器は，合計 29 点が資料化されている。このうち，エジプト様式と判断できる土器（BL 3 型）は合計 12 点で，これは全体の 31% に相当する量である（第 11 図参照）。母数が少ないため，31% という割合は厳密な値とは言い難いが，少なくとも，「エジプト総督居館」が置かれていたテル・モル（13%）やテル・アフェク（35%）と同様の傾向でエジプト様式の土器群が出土していることは明瞭であろう。このことから，後期青銅器時代 IIB 期から鉄器時代 IA 期のテル・ゼロールはエジプトの支配下に置かれていたと考えることができる。またテル・ゼロールの 17-14 層ではエジプト様式の土器が 1 点も出土していない（第 11 図参照）。したがって，テル・ゼロールは 13 層からエジプトの支配下に組み込まれたと考えられる。13 層の年代を厳密に求めることはできないが，おそらく第 19 王朝時代にシャロン平野南部のテル・アフェクに「エジプト総督居館」が建設され，エジプトの覇権がシャロン平野北部にも直

接的に及ぶようになった頃と符合していたと推測できる。

Ⅳ. 鉄器時代 IB 期のテル・ゼロール

1. 鉄器時代 IB 期の遺構

［南のテル 8-7 層］

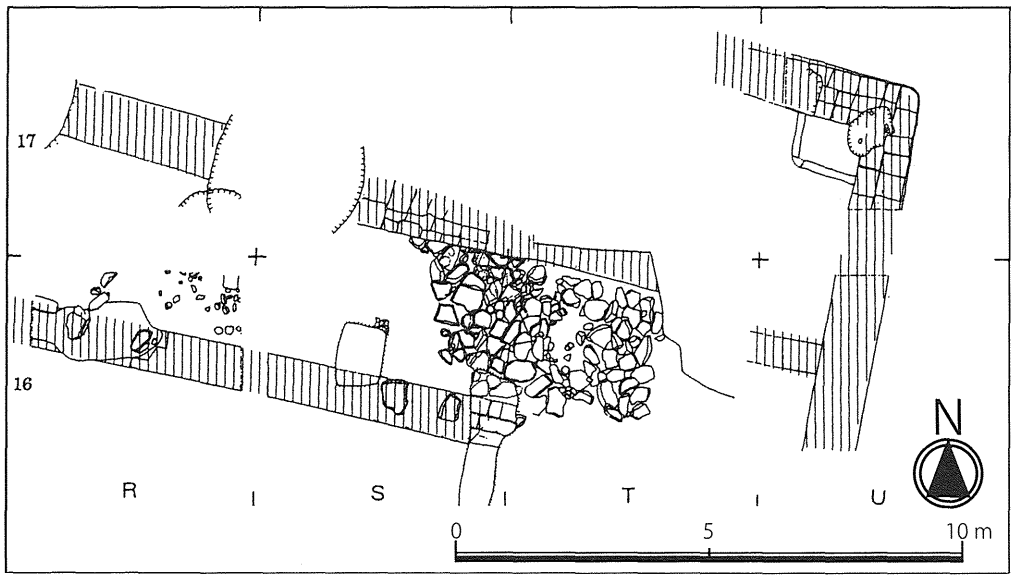
9 層の大型建物の直上に堆積した破壊層およびピット群（第 5 図参照）のうち，8-7 層とされる土層はいわゆるペリシテ土器（バイクローム土器）を含んでおり，8-7 層は鉄器時代 IB 期に位置づけられる[30]。検出された遺構は 30 基以上のピットだけで，南のテルでは，鉄器時代に属する建物の遺構は確認されていない。ピットは直径 2m，深さ 1m ほどの大きさのものが多く，9 層の大型建物直上に積もった瓦礫層へと掘り込まれている。貯蔵用のピットは，イズベト・ツァルタやテル・エン・ナスベー（Tell en-Nasbeh）といった古代イスラエル人の定住遺跡に特徴的な遺構であり，大抵は石による縁取りや床面の舗装が施されている（Finkelstein 1988: pp. 264-269）。それらに比べると，テル・ゼロールで検出されたピットは粗末なつくりである。ピットからは動物骨と土器片が出土している。土器片は鉢，調理鍋，カラードリム・ピトスの破片であり，この組み合わせは中央高地のイスラエルの定住遺跡の土器組成と重なる内容である。

［北のテル XI-X 層］

「黄色日乾レンガの建物」（X 層）以前に相当する土層が XI 層とされている。発掘自体が十分に到達していないこともあり，XI 層の層位学的な位置づけは明確になっていない。特筆すべき遺構が検出されなかったこともあり，調査記録を読む限りにおいても，後に続く X 層との区別も曖昧である。

報告書の中で「黄色日乾レンガの建物」と呼ばれる建造物が属するのが X 層である。2 枚の強固な壁がほぼ並行して検出されたことから，この建造物は当初，ケースメート式城壁（Casemate Wall）を持つ砦であったと考えられた。その後，1974 年の第 4 次発掘によって建造物の北東の角（U-17 地区）が確認され，T-16 区画と S-16 区画の間にあった隔壁が外され石敷きの床面の延長が検出されている。第 7 図は，この新たな成果を含めた遺構実測図を基に作成した X 層の平面図である。平面図からは，X 層の建造物が長方形をした何らかの施設であったことを伺える。室内の北東の角からは，日乾レンガを垂直方向に立てて台のような構造物を設置していた痕跡が発見されている。床面からは原位置を保った状態で調理鍋や水差しが出土した。出土した土器はメギド VIA 層やテル・カシーレ X 層と並行するもので，これによって X 層の年代を前 11 世紀の後半に位置づけることができる。

南のテル 8-7 層と北のテル XI 層で住居など建造物の遺構が見つかっていないことから，鉄器時代 I 期の住民は天幕や粗末な小屋に住み「半定住的（semi-nomadic）」な生活をしていたと推測されている（The Society for The Near Eastern Studies in Japan 1974: p. 7）[31]。つまり，公共建造物が建っていた 9 層が破壊された後に，住民の生活様式が大きく変化したということにな



第 7 図　テル・ゼロール X 層の平面

る。「半定住的」な居住はしばらく続いたのち，前 11 世紀後半に強固な建造物（X 層）が建設され，テル・ゼロールは再び繁栄期（IX 層・鉄器時代 IIA 期）を迎えることになる。

2. 鉄器時代 IB 期（8-7 層）の土器

[鉢 / 椀]

テル・ゼロールの鉢を大きく分類すると，4 つの型式に分類することができる。

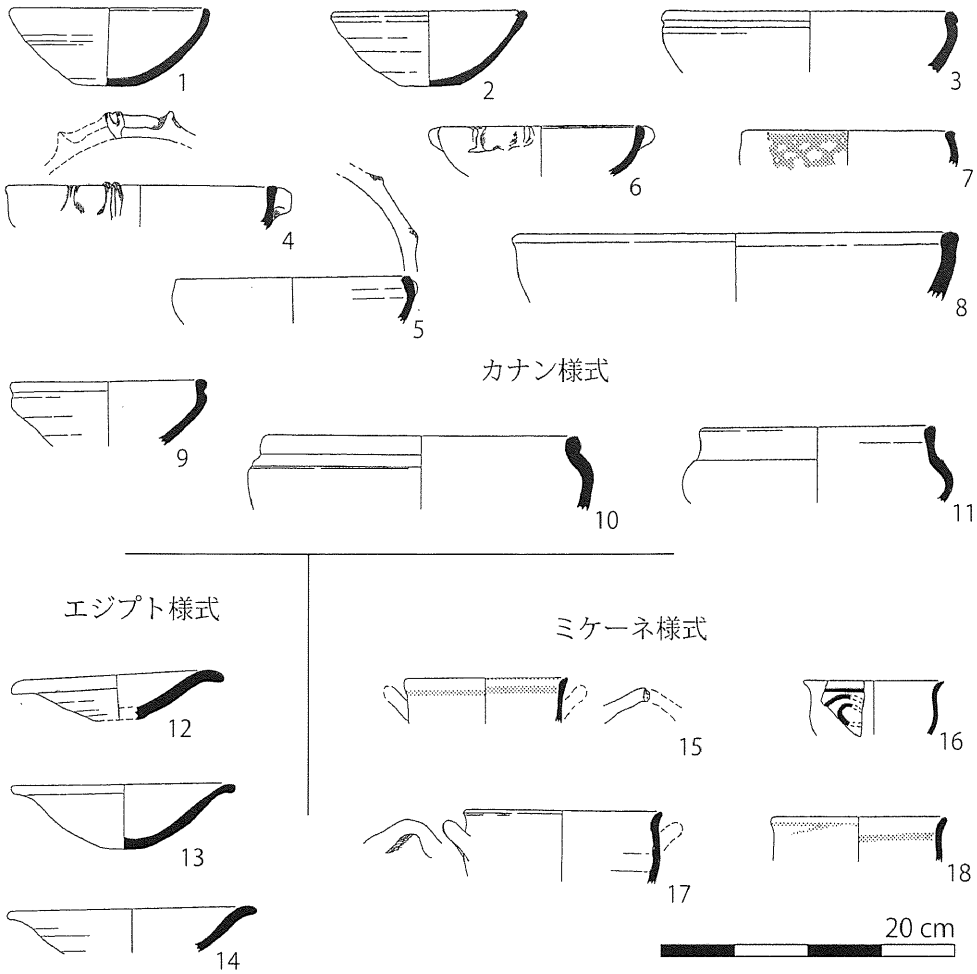
(1) BL 1 型 胴部が湾曲している鉢型土器（Rounded Bowl）

(2) BL 2 型 屈曲部がある鉢形土器（Carinated Bowl）

(3) BL 3 型 エジプト様式の皿形土器（Egyptian-style Bowl）

(4) BL 4 型 スキュフォス（skyphos）

BL 1 型（第 8 図 : 1-8）に属する鉢は後期青銅器時代から一般的に存在する型式で，鉄器時代 I 期にも引き続き使用されていた。第 8 図 : 1-2 のように，底部に台が取り付けられていないものは，既に述べたように，南レヴァントにもエジプトにも見られる型式である。第 8 図 : 3 は口縁部のすぐ下を溝が走っていて，口縁は丸く整形されている。類似した口縁部を持つ鉢はイズベト・ツァルタ III 層で出土している[32]。第 8 図 : 4-6 は棒状の把手が口縁部に沿って横向きに付けられているのが特徴である。棒状の把手は後期青銅器時代から存在している[33]。第 8 図 : 7 は赤色の文様が描かれている。また第 8 図 : 3, 5, 7 のように口縁部が内側にやや傾いている鉢も鉄器時代 I 期の南レヴァントで広く見ることができる[34]。第 8 図 : 8 は胴部が湾曲した大型の鉢で，口縁部はわずかに厚くなるように加工されている。テル・ゼロールでは同型の土器が後期青銅器時代（15 層）から存在している。またドルの「Iron 1b late」層や「Iron 1/2」層，ハツォール IX 層に類似した土器を見ることができる[35]。BL 2 型のうち，第 8 図 :

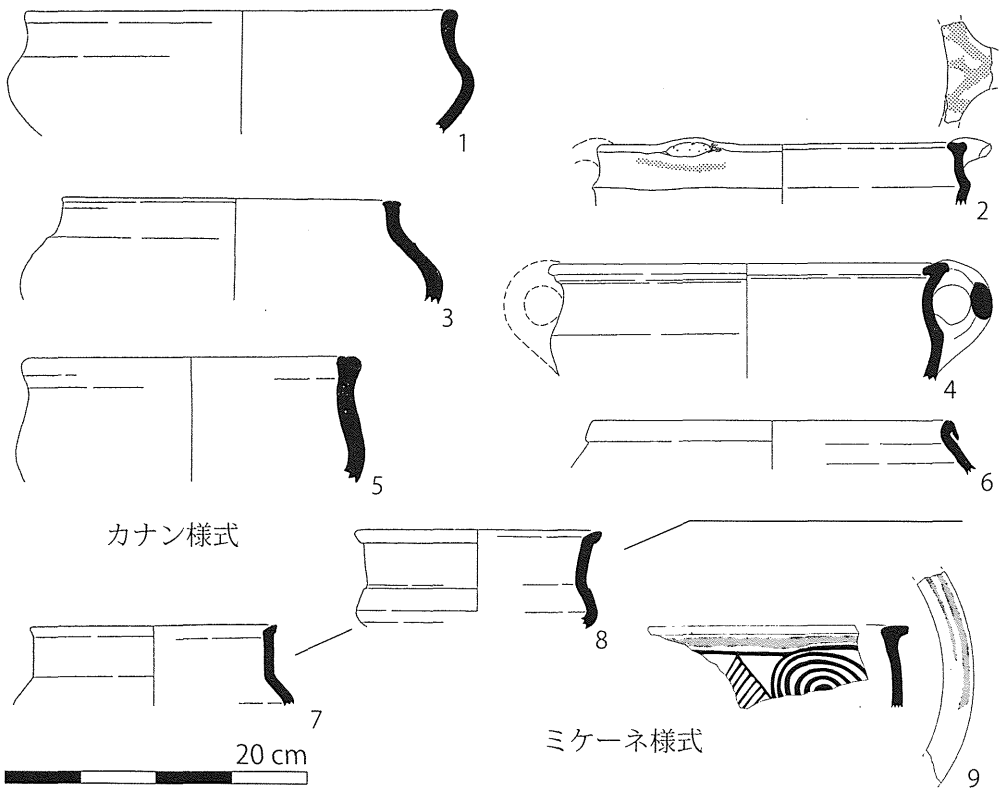


第 8 図　テル・ゼロール 8-7 層出土の鉢形土器

9-10 は口縁に近い位置に屈曲部があり，口縁部にも加工がみられる。同型の土器は比較的大きなものが多く，大抵はクラテールに分類される（後述）。第 8 図 : 9-10 のようにクラテールとするには小型のものはハツォール XII 層，ドルの「Iron Ib late」層に見ることができる[36]。第 8 図 : 11 は胴部に屈曲があり，そこから器壁がほぼ垂直方向に立っている。同型の鉢はハツォール IXb 層で出土している[37]。ハツォールの後期青銅器時代層に同型のクラテールを見ることができることから[38]，この型式も後期青銅器時代の系統を受け継いでいると考えられる。第 8 図 : 12-14 は前章で詳しく述べた BL 3 型に属するエジプト様式の土器である。テル・ゼロールは後期青銅器時代 IIB 期とおそらく鉄器時代 IA 期にエジプトの影響下に置かれていたが，その時期に根付いたエジプト様式に属する型式が鉄器時代 IB 期まで残存していたと考えられる。もしくは，9 層以前の土器が混入したのかもしれない。この時期のテル・ゼロールではスキュフォス（第 8 図 : 15-18）が出土するようになることが特筆される。

［クラテール］

鉄器時代 IB 期のテル・ゼロールにおける最も一般的なクラテールは胴部が屈曲したクラテール（第 9 図 : 1-6）で，これは後期青銅器時代の特徴を受け継いだ型式である。口縁部の形状に目を向けると，比較的シンプルでやや外反するもの（第 9 図 : 1, 5）と，垂直方向に立ち上がるもの（第 9 図 : 3）が存在している。また口縁部が，内側と外側に引き伸ばされているもの（第 9 図 : 2, 4）や，外側に折り返されているもの（第 9 図 : 6）も出土している。このような特長を持つクラテールは後期青銅器時代から見ることができ[39]，周辺遺跡の鉄器時代 I 期層においても類例を見ることができる[40]。第 9 図 : 7-9 は 9 層の上に堆積した破壊層から出土した資料であるが，鉄器時代 I 期のクラテールに含めることに問題はない。第 9 図 : 7-8 は円柱状の広口頸部を持ち，口縁部の先端は外側に向かって開くように傾斜している。こうした頸部と口縁部をアンフォラ形クラテール（Amphoroid Krater）と呼ばれる類のクラテールに特徴的な要素である。アンフォラ形クラテールはミケーネ土器に起源があると思われる型式で，後期青銅器時代末期にレヴァントでも見られるようになる[41]。鉄器時代 I 期にも引き続き使用され，ドル，テル・ケイサン，テル・アブ・ハアム，メギドといったイスラエル北部の遺跡でも出土している[42]。アンフォラ形クラテールには彩文が施される場合が多いが，第 9 図 : 7-8 では彩文の痕跡が見られない。第 9 図 : 9 はスキュフォスと同型のベル形を呈したクラテールである。ベル形クラテールもミケーネ土器に由来する型式で，おそらく，スキュフォスとセット

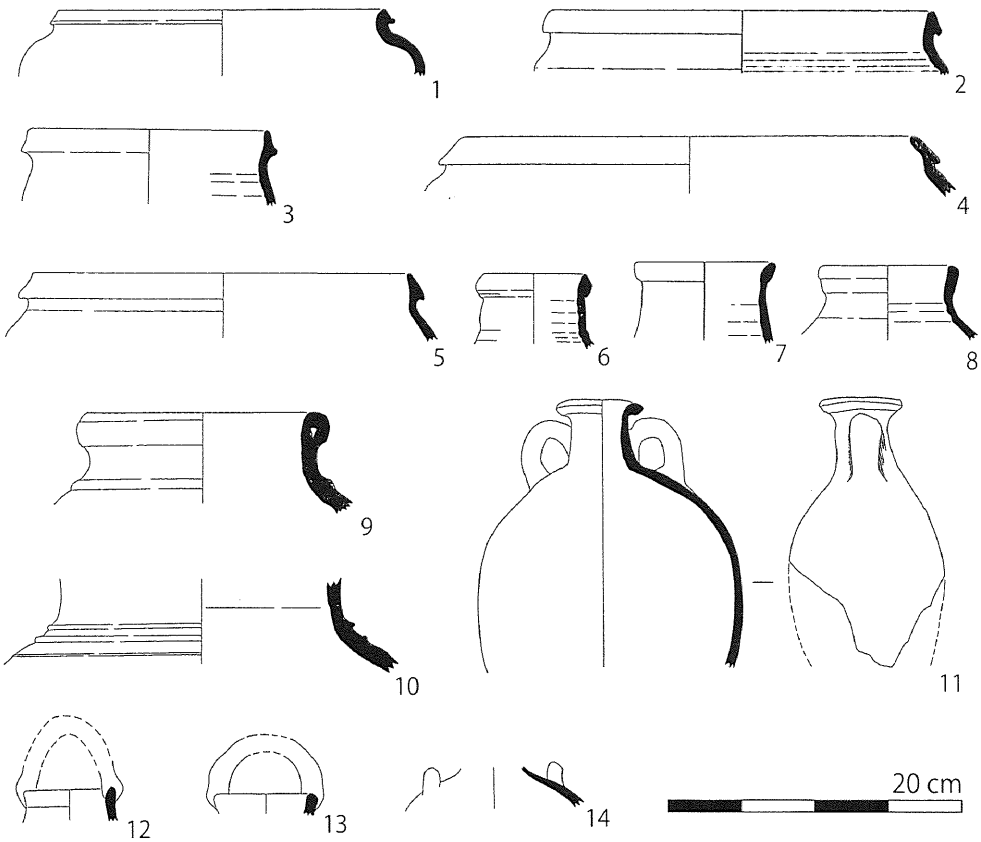


第 9 図　テル・ゼロール 8-7 層出土のクラテール

で用いられたと考えられる。南部海岸平野ではペリシテ土器レパートリーの１つとなった[43]。第９図：9は白色化粧土を用い，渦巻文と菱形文を組み合わせた文様が赤と黒の二色で描かれている。このような彩文様式や図柄は，南部海岸平野のバイクローム土器（ペリシテ土器）に典型的な要素であり（Dothan, T. 1982: pp. 106-113, pp. 204-208, p. 212），第９図：9も南部海岸平野やその周辺地域から搬入されたクラテールであると思われる。類例はアシュドド，ゲゼル，テル・カシーレ，イズベト・ツァルタなど遺跡で見ることができる（Dothan, T. 1982: pp. 113-115）。

［調理鍋］

第10図：1-5は8層と7層から出土した調理鍋である。いずれも屈曲した胴部と湾曲した底部を持つ鉄器時代Ⅰ期の南レヴァントで一般的な型式である。口縁部の形状は様々で，第10図：1-2は外側に向かってやや反り返り，断面は三角形に近い。このような調理鍋の類例はテル・ケイサン13-12層で見ることができる[44]。第10図：3-5は口縁部がほぼ垂直方向に立ちあがっているか，やや内側に傾いているもので，さらに折り返し部分の内側が凹んでいる。この型式はドル，テル・ケイサン，メギドといった遺跡の鉄器時代Ⅰ期層を通して類例を見ることができる[45]。ちなみに8-7層からは調理用水差し（Cooking Jug）と呼ばれる把手付きの調理鍋が確



第10図　テル・ゼロール8層-7層の出土土器

認されていない。

[その他]

資料化されている 8-7 層の出土土器には，他に貯蔵用壺，ピトス，フラスコ，水差し，ピュクシスが含まれている。出土した貯蔵用壺は，口縁と頸部しか残っていないため，全体の形は分からないが，長頸壺（第 10 図 : 6-7）と短頸壺（第 10 図 : 8）が存在していることが分かる。第 10 図 : 9 はカラードリム・ピトスの口縁部である。第 10 図 : 10 は後期青銅器時代のガリラヤ地方で見られる型式のピトスの特徴を受け継いでいる。フラスコ（第 10 図 : 11），アーチ上の把手がついた水差し（第 10 図 : 12-13）も後期青銅器時代に引き続き，鉄器時代にも表れる型式の土器である。第 10 図 : 14 のピュクシスは搬入品である可能性があるが，現物を確認できていないため，現時点では判断できない。

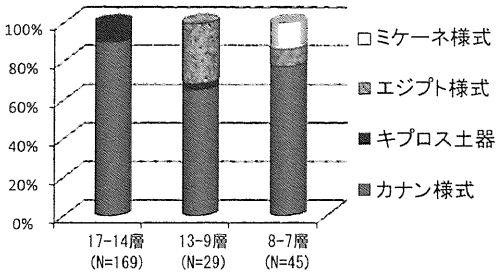
3. 土器組成の特徴

鉄器時代 I 期のテル・ゼロールの出土土器を検討してみると，その大部分が後期青銅器時代の土器作りの伝統を受け継いだ土器であり，周辺遺跡の鉄器時代 I 期層に類例が存在していることが分かった。また，ミケーネ土器の器形を踏襲した土器（スキュフォス，ベル形クラテール，アンフォラ形クラテール）が混じっていることを確認することができた。このように，後期青銅器時代の特色を残す土器が主体的に出土し，ミケーネ土器からもたらされた型式が混ざっているという状況はドルやテル・ケイサンと類似している。つまり，テル・ゼロールの土器組成の全体的特徴は，イスラエル北部沿岸地域に典型的なものといえる。しかし，鉄器時代 I 期のテル・ゼロールからは，ドルとテル・ケイサンに見られるキプロスからの搬入土器と，キプロス土器を模倣した現地生産土器（第 3 図参照）が出土していない。このようにキプロスとの交流を示す土器の有無が，テル・ゼロールの土器組成とテル・ケイサンおよびドルの土器組成の大きな相違となっている。

V. 結論

テル・ゼロール出土資料に検討を加えた結果，シャロン平野の鉄器時代 I 期に関して，以下のような変遷を描くことができるだろう。前 13 世紀に，エジプト第 19 王朝が南レヴァントの統制を強化したことによって，シャロン平野はエジプトの影響下に置かれることとなった。テル・アフェクのみならず，テル・ゼロールの出土資料からもエジプトの強い影響を裏付ける傾向が見出されたことで，エジプトの支配がシャロン平野全域に及んでいたことを想定できる。これには，海岸平野を北上し，エズレル平野に至るルートを確保する狙いがあったのであろう。当時の国際幹線道路であった「海の道」は地中海の海岸沿いをジャッファまで北上すると，ちょうどシャロン平野の森林地帯を迂回するように内陸に入り，テル・アフェクやテル・ゼロール周辺を通って，エズレル平野のメギドにつながっていたと考えられる（Dorsey 1991）。古代の軍隊が 1 日に行軍できる距離はおよそ 30 km とされているが，「海の道」に沿って存在する「エ

ジプト総督居館」は30 km以内の間隔で分布していることが分かる（第1図参照）。しかし，アフェクから，エジプトの支配下にあったと思われる都市国家メギドまでは，それ以上の距離があるため，中間地点にあたるテル・ゼロールを支配しておく必要があったのだろう。こうしたエジプトの勢力がシャロン平野から撤退したのは，第19王朝末期か第20王朝の頃だと推測される。第20王朝が成立した頃の東地中海世界は動乱の時代であり，その中で，各地にミケーネ風の文化を持つ集団が誕生することが知られている。南部海岸平野に入植したペリシテ人が顕著な事例である。テル・カゼル（Tell Kazel），サレプタ（Sarepta），テル・アッコ，テル・ケイサンといった地中海岸の都市遺跡においても，すでにミケーネ風の飲食習慣がこの時期（鉄器時代IA期）に受け入れられている痕跡が見られる。しかし，シャロン平野にミケーネ風文化が流入するのは，鉄器時代IB期になってからであった。後期青銅器時代末から鉄器時代IA期のテル・ゼロール（9層）にはおそらくエジプトの勢力が残存していたために，周辺地域からの影響を強く受けなかったと考えられる。その後，エジプトが撤退したことによってシャロン平野にも「力の真空」が生じ，そこに地中海沿岸地域で受容されていたミケーネ風文化が流入することになったのであろう。その結果，シャロン平野に形成された文化は，テル・ゼロールの出土資料が表しているように，ミケーネ風文化の影響が若干認められるものの，基本的に後期青銅器時代の伝統を受け継ぐ文化であった。この点でシャロン平野の文化は，ペリシテ人が定着した南部海岸平野とは異なり，むしろフェニキア文化に近い特性を有していたと結論づけられる。以上は，現在利用できる考古資料から復元できるシャロン平野の鉄器時代Ⅰ期に関する最も妥当な歴史であるといえよう。



第11図　テル・ゼロールの土器組成の特徴

Ⅵ. おわりに

最後に，鉄器時代Ⅰ期のシャロン平野で上記のような文化が形成された要因について，いくつかの可能性を考察してみたい。ギルボアは，その要因を定着した「海の民」の集団の規模に求めている。南部海岸平野に入植した「海の民」の集団は，携えてきた固有の文化（少なくとも土器に関する習慣）を新しい土地に移植させ，200年間にわたって維持するだけの規模と力を持っていた。それに対してイスラエル北部沿岸地域に入植した「海の民」は集団としての規模が小さく，常にマイノリティとして存在していたために，例えば土器産業を興し自分たちの趣向に合った土器生産を行なうといったことができなかったという仮説である[46]。また「海の民」諸族が持つ多様性，具体的にはシキラ人やシェルデン人とペリシテ人のエスニシティの違いが要因であった可能性もある。ペリシテ人が明らかにミケーネの文化を背景とした民族集団であったのに対し，シキラ人やシェルデン人はペリシテ人とは別の地域からの入植者であっ

たと考えることができる[47]。しかし，このような考察は今のところは憶測の段階に留まるしかなく，特にレバノンやシリアの沿岸部における更なる考古資料の蓄積が待つしかない。

そこで，シャロン平野が，ペリシテ文化と「フェニキア」文化の境界となった背景について，別の側面から考察を加えることにする。まずシャロン平野の町々が鉄器時代 I 期に荒廃していた状況にふれておきたい。テル・ゼロールは南のテル 9 層が破壊されてから約 150 年間にわたって「半定住的」集落となっていた。また同時期の付近の遺跡の状況も同様であった。テル・メボラフ（Tel Mevorakh）やテル・アサウィール（Tell el-Asawir）は放棄され，テル・ジャットも繁栄を失っていた[48]。このようなシャロン平野の町々の荒廃が，イスラエル北部沿岸地域と南部海岸平野の交流を阻害し，結果として本論で示したような物質文化の差異が生じたという可能性は十分にあるだろう。反対に南北の交易が途絶えたことでシャロン平野の町が没落したと考えることもできる。いずれにしてもシャロン平野の町々の状況とイスラエル沿岸部の南北を結ぶ交易網との間には相関関係があるようである[49]。テル・バタシュ（Tel Batash）やベト・シェメシュ（Beth Shemesh）といった南部海岸平野よりも内陸に位置する多くの遺跡から「ペリシテ土器」が出土しているが[50]，イスラエル北部沿岸地域では，スキュフォスが目立って出土しているものの，「ペリシテ土器」に特徴的なバイクローム土器はあまり出土していない。逆に，南部海岸平野の遺跡では，北部沿岸地域に見られるキプロスからの搬入土器が出土していない。この現象は，ペリシテ文化が北よりもむしろ内陸方向に向かって拡大したことを示している。おそらくペリシテ人は，イスラエル北部沿岸地域との間の交易網が途絶えたことによって，キプロスから供給される銅を入手できなくなり，シナイ半島の銅を求めて内陸に進出したと考えられる[51]。このようにペリシテ人が北方への進出に積極的でなかったことも，シャロン平野を含むイスラエル北部沿岸地域に独自の文化が形成された要因であろう。

本論を執筆するにあたり，指導教官である筑波大学の常木晃先生，慶應義塾大学の杉本智俊先生，長谷川敦章氏をはじめとする筑波大学先史学・考古学コースの諸氏から，ご指導を賜った。また，桑原久男先生，巽善信先生をはじめとする天理大学および天理参考館の方々からは，貴重なご助言をいただくとともに，所蔵資料を用いることを許可していただいた。末尾ながら厚く御礼申し上げます。

註

1) 鉄器時代 I 期は前 10 世紀末まで続いたとする解釈も可能である（フィンケルシュタインの低年代説）。年代に関する議論は Finkelstein 1995, 2000, Mazar 1997, Gilboa and Sharon 2003 などを参照されたい。

2) 前 1136 年はラムセス 6 世の治世に相当し，エジプトの覇権が南レヴァントに及んでいた痕跡はこの時期まで見られる。エジプト支配の有無は考古資料を解釈する際の重要な要素であるため，本論でも前 1136 年頃を一つの画期と捉えている。年代はキッチンの低年代説による（Kitchen 2000）。

3) 例えば，ラス・イブン・ハニ（Ras Ibn Hani）ではウガリト王国滅亡後に，ミケーネ IIIC 式土器を伴う集落が建設されている（Bounni, Lagarce and Saliby 1978, 1979）。ステイガーが言うようにラス・イブン・

ハニのミケーネ IIIC 式土器が出土土器の過半数を占めているとすれば（Stager 1995），ペリシテが建設した南部海岸平野のエクロン VII 層に匹敵する割合であり，「海の民」の定着を想定できる。

4）かつてはチェケル（Tjekker）という音訳が一般的であったが，現在はウガリト文書との比較研究の成果を受け，シキラ（Šilila）などと読むのが一般的になっている。

5）具体的には，ライオンの頭部を模したカップ，瓶形ピュクシス Bottle Pyxis（Ohata 1970, pls. 59: 6, 15: 2, 60: 3），濾し器付水差し（Ohata 1967, pl. 10: 8）などで，T・ドタンによってまとめられた『ペリシテとその物質文化』（Dothan, T. 1982）に含まれているもの。

6）調理鍋，4つの把手が取り付けられた貯蔵壺，屈曲した胴部の鉢型土器。

7）註5を参照されたい。

8）ドルでは，後期青銅器時代から鉄器時代への移行期（ミケーネ IIIC 式モノクローム土器，エジプト第20王朝並行期）の層位が明確に検出されていない。本論中のドルの層位表記は Gilboa and Sharon 2003 に準じる。

9）例えば，クラテールに見られる4型式（KR1，KR2，KR20，KR21，Gilboa and Sharon 2003, figs. 2: 14-20）はいずれも後期青銅器時代に原型が存在し，調理鍋（CP5，CP7，CP11，CP14，Gilboa and Sharon 2003, fig. 3: 1-3）は，口縁部直下が内側にわずかに出っ張っており後期青銅器時代の特徴を残している。ギルボアは貯蔵壺（Gilboa and Sharon 2003, fig. 4: 1-9）をはじめ，水汲み，フラスコなどの小型容器，ピトスにおいても後期青銅器時代から継続する型式が主体的であるとしている。また「Iron 1a late」層の鉢形土器の主要な型式（BL23，Gilboa and Sharon 2003, fig. 2: 5-9）は，未発表の「Iron 1a early」層の土器（未発表）を介すことで，その原型が後期青銅器時代にあることを示している（Gilboa 2001b: p. 174）。

10）双耳杯を意味し，フルマルクによるミケーネ土器の器形分類では FS284-6 に相当する（Furumark 1941: p. 634）。他に Mountjoy 1986: p. 205, Dothan, T. 1982: p. 9 を参照されたい。

11）T・ドタンの『ペリシテとその物質文化』ではタイプ1として論じられている（T. Dothan 1982: p. 95）。

12）タルスス（Tarsus），テル・アフィス（Tell Afis），ラス・イブン・ハニ，テル・カゼル（Tell Kazel），ティール（Tyre），サレプタ（Sarepta）など。

13）太線で描かれた円の内側に，細線による螺旋や同心円が組み込まれ文様で，キプロスの土器に特徴的な図柄である（Gilboa 2005: p. 55）。例えば，キティオンやマア・パレオカストロで類例が見られる（Karageorghis et al. 1981, pls. XI: 8, XIV: 27, Karageorghis and Demas 1988, pls. CLXX: 98, CLXXXIII: 482, CLXXXV: 573）。

14）「ティール式壺 Tyrian jar」（Flankel 1994），「キプロス・ティール式ピトス Cypro-Tyrian pithos」（Raban 2001），「波状文付ピトス Wavy-band Pithos」（Gilboa 2001a, 2001b, 2005）などと呼ばれているが，その特徴的な文様がキプロスの様式であるという点が重要であり，本論ではキプロス式ピトスと呼ぶことにする。

15）アシュドドでキプロス式ピトスと思われる破片が報告されているだけである

16）Gadot 2006, fig. 1-2 によると，後期青銅器時代の居住は3遺跡で確認できるが，鉄器時代Ⅰ期の居住は17遺跡で確認できる。

17）特に土器文化は特徴的で，報告書（Mazar 1985a）からは，ベル形の双耳杯やクラテール，バイクローム様式のステアラップ・ジャーといったペリシテの遺跡に特徴的な要素と，土着の器形に，赤色化粧土（Mazar 1998）や彩文を多用する新しい装飾様式で施文した土器が混在している様相を看取できる。また宗教遺物の中にも，ペリシテ文化と地元のカナン文化の双方の要素を見ることができる（Mazar 2000）。

18）アマルナ文書で知られるギンティ・キルミル（Gilti-Kirmirl）に同定されている（Goren, Finkelstein and Na'aman 2004: p. 257）。

19）報告書では，「北のテル」の層位はローマ数字で，「南のテル」の層位は算用数字で表されているが，本論でもそれを踏襲する。

20）発掘調査では，溶鉱炉，スラッグ，るつぼ，鞴といった青銅産業の存在を明確に示す遺構や遺物が検出された（Ohata 1967: pp. 47-51）。

21) 同建造物は，報告書中の「南のテル平面図」に部分的に現れているが（Ohata 1966: pl. III の 9 層），第 2 次調査以降の成果は反映されていない。図 5 は天理大学が所蔵する実測図をもとに作成した。

22) 典型的な昇炎式の窯ではなく，燃焼室と焼成室が水平方向に並んでいる。

23) 例えば，テル・エル・ダブア（Aston 2001, fig. 11: 1, 13: 1），カンティール（Aston 1998: no. 20-21, 64-74），エレファンティネ（Aston 1999, nos. 15, 31, 81-87, 107, 169, 220）などで類例を見ることができる。

24) Bikai 1978, pls. XLII: 6, 14, Yadin et al. 1958, pl. CV: 1, Yadin et al. 1960, pls. CXXVIII: 1, CXLI: 1-2, Yadin et al. 1961, pl. CCLXXI: 6, Loud 1948, pls. 65: 5-6, 10, 16, 68: 15-6, 71: 18, Dothan and Porath 1993, fig. 11: 8 など。

25) 17-14 層では，資料化された土器（152 点）のうち，17 点（約 11%）がキプロス土器である（第 11 図）。出土している器形は，ホワイト・スリップ土器（White Slip Ware）の鉢（いわゆるミルク・ボウル），モノクローム土器（Monochrome Ware）の把手付き鉢，ベイス・リング土器（Base Ring Ware）の把手付き鉢，水差し，小型水差し，ホワイト・シェイブド土器（White Shaved Ware）の尖底小型水差しで，多岐にわたっている。データは天理参考館所蔵の調査関連資料による。

26) セティ 1 世碑文，軍の司令官と思われる人物の名前が刻まれたまぐさ石，ラムセス 3 世像など，ベト・シャンが，第 18 王朝から第 20 王朝時代にかけてエジプトの重要な拠点であったことを示す様々な遺物が発見されている（Mazar 1993: pp. 217-222 など参照）。また，アマルナ文書の胎土研究によると，カナン都市の領主のメッセージがベト・シャン経由でエジプトに伝わっている事例があり，ベト・シャンが行政の拠点として機能していたことが明示されている（Goren, Finkelstein and Na'aman 2004: pp. 323）。

27) Loud 1948, pl. 61: 11, Burdajewicz 1994, pls. 12:18, 25: 24-25, Tufnell, Inge and Harding 1940, pl. 37: 25。メギド，ラキシュ，テル・レヘシュはカナン人の都市国家であったが，エジプトとの関連が全くないわけではない。例えば，メギドではラムセス 6 世像の台座が出土し，ラキシュでは城門に刻まれたラムセス 3 世のカルトゥーシュが検出されている。テル・レヘシュの付近ではエジプト語碑文の断片が発見されており，遺跡からもエジプトで生産された土器が出土している（キブツ・エンドール考古学博物館の A・カルメラ氏からご教示を受けた）。少なくとも，メギドとラキシュはエジプトの政治的影響下にあったと考えられる。

28) ハツォール（Ben-Tor 1997, fig. III: 16, 15），カミド・エル・ロズ（Metzger 1993, pl. 117: pp. 1-5）。

29) 例えば，テル・モルではエジプト様式の土器が土器組成の 10% 以上を占めているが（前述），こうした土器は，5 km 強しか離れていないアシュドド（Ashdod）では全く出土していない。エジプト様式の土器の大部分は BL 3 型のような粗製の日用土器である。したがって，これらの土器が，交易品の容器として，あるいはそれ自体が付加価値を帯びた商品となって，エジプトの活動拠点以外の町に運ばれることがほとんどなかったと考えられる。またエジプトの勢力と，周辺都市との間の緊張関係も要因として指摘されている（Bunimovitz and Faust 2001 など）。時期差があったと考える研究者は少数である（Ussishkin 1985, Finkelstein 2000 など）。

30) 報告書等の文献では，南のテルでは 8-5 層が鉄器時代 I 期とされている。しかし出版準備中の図版や発掘調査時の記録（調査日誌，ローカス日誌，土器区分作業の記録）を読むと，6-5 層からはむしろ鉄器時代 II 器の土器が目立って出土しており，層位学的な状況も曖昧であることが分かった。よって 6-5 層を本論の対象から外すこととした。

31) 鉄器時代初頭のピット群は建築遺構に伴って出土する事例が多く（Finkelstein 1988），テル・ゼロールでは北のテルに同時期の居住址があった可能性があるが，発掘調査が十分な深度まで到達しなかったために確認できていない。

32) Finkelstein 1986, fig. 11: 10

33) Yadin et al. 1958, pl. CVI: 28-29, 1960, pls. CXXIV: 3, CLI: 20, Loud 1948, pl. 72: 4 など。

34) Anderson 1979, pls. 29: 22, 31: 12, 1988, pls. 29: 22, 31: 12, 14, 47: 26, 24, Bikai 1978, pls. XXXVII: 11, XXXIII: 5, 16, Yadin et al. 1961, pls.CLXXIV: 1, CLXXVIII: 10, CCVIII: 3, 6, Burdajewicz 1994, pls. 22: 5-6, 25: 19, 33: 14, 35: 9, 11, Briend and Humbert 1980, pls. 80: 4a, 4b, 66: 4, 6, 13, Finkelstein, Zinahoni and Kafri 2000, figs. 11.1: 1, 11.2: 1, 3, Loud 1948, figs. 74: 1-2, 4-5, 78: 2, 11, Gilboa 2001b, pls. 5.1: 2, 5.29: 15-16, 22-23, 25, 32-33, 5.40: 8-9, 18-20, 5.59: 1, 7-8, 15-17, 5.67: 8-10, 14-16, Mazar 1985a, figs. 11: 1-5, 17: 9, 18: 4, 22: 3-4, 24:

1-4, 6, 28: 8, 11-13, 33: 12, 14, 39: 4, 15, Finkelstein 1986, figs. 11: 3, 10, 13, 24: 3 など。

35) Gilboa 2001b, pls. 5.40: 26-27, 5.54: 1, Yadin et al. 1961, pl. CCXII: 20 など。

36) Yadin et al. 1961, pl. CCI: 3-5, Gilboa 2001b, pl. 5.49: 19 など。

37) Yadin et al. 1961, pl. CLXXV: 4

38) Yadin et al. 1961, pls. LXXXV: 11, 13, CXXVIII: 2, CXLIV: 5

39) 例えばテル・アブ・ハワム（Balensi 1980, pl. 9: 1, 7），メギド（Loud 1948, figs. 69: 16, 70: 2, Finkelstein and Zinahoni 2000, fig. 10.2: 16, 19），アシュドド（Dothan and Porath 1993, fig. 10: 6）などに事例を見ることができる。

40) メギド（Loud 1948, figs. 74: 12, 78: 17, 79: 1），ドル（Gilboa 2001b, pls. 5.1: 2, 5.19: 28-9, 5.22: 1, 5.30: 1-5 など），テル・ケイサン（Burdajewicz 1994, pls. 16: 18, 28: 1, Briend and Humbert 1980, pl. 78: 1-4）など。

41) テル・ゼロール付近では，テル・アブ・ハワムでミケーネIIIB式のアンフォラ形クラテールが16点（Balensi 1980, pl.31: 1-16）報告されている。またジャットやメギドの後期青銅器時代墓から，アンフォラ形クラテールと類似したクラテールが出土している（Yannai 2000, fig. 10: 113, Guy 1938, pl. 8: 9）。

42) Gilboa 2001b, pls. 5.1: 9, 5.5: 18-19, 5.14: 5-6, 5.19: 25, 5.30: 8-9, 11, 5.41: 2, 5.47: 5, 5.49: 16, Burdajewicz 1994, pl. 19: 1, Balensi 1980, pl. 10 : 9 , Finkelstein, Zinahoni and Kafri 2000, fig. 11.2: 8.

43) T・ドタンの分類におけるタイプ2（T. Dothan 1982: p. 106）。

44) 例えば，Burdajewicz 1994, pls. 11: 16, 16: 15, 18: 9c など。

45) Gilboa 2001b, pls. 5.24: 6-10, 5.41: 11-12, Burdajewicz 1994, pls.23: 24, 31: 4, Briend and Humbert 1980, pl. 63:4c, 7, Loud 1948, fig. 95: 16, Finkelstein, Zinahoni and Kafri 2000, fig. 11.2, 9, 12 など。

46) Gilnoa 2001b: pp. 447-448

47) 例えばイスラエル北部沿岸地域に入植した集団は，ウガリト王国が滅亡によって大規模な難民が発生したであろう北シリアから流入した人々だった可能性がある。イスラエル北部沿岸地域の土器組成に特徴的なアンフォラ形クラテールは後期青銅器時代のキプロスと北シリアに見られる型式であるし，テル・アブ・ハワムとテル・アフェクからはシリアに見られる様式の住居（Balensi 1980, pl. 57, Kochavi 1993c: p. 68）が出土している。シキラとシェルデンが北シリアからやって来たとすれば，後期青銅器時代の文化伝統が継続し一部にキプロスの影響を受けた器種が見られるという土器組成の特徴は容易に説明がつく。

48) Kochavi, 1993b, Porath, Yannai and Kasher 1999: pp. 167-168 を参照。

49) 逆にテル・ゼロールが町として繁栄していた後期青銅器時代層ではキプロスからの搬入土器が豊富し出土している。同じように繁栄を取り戻した鉄器時代Ⅱ期の層位からはキプロス - フェニキア式の赤地黒彩土器（Black on Red Ware）が出土している。このようにテル・ゼロールの町が繁栄している時期においては，イスラエル沿岸部の南北を結ぶ交易活動を示す土器がテル・ゼロール自身やシャロン平野以南の遺跡から出土している。

50) Dothan, T 1982 で詳しく論じられている。

51) 例えばバラコはアラビア半島の土器が南部海岸平野周辺で出土している事例を挙げ，ペリシテ人がシナイ半島やアラビア半島との交易に積極的であったことを示している（Barako 2000）。

図の出典

第1図　筆者作成。下図の地形図はカシミール3Dを用いて作成した。

第2図　筆者作成。

第3図　1-2はGilboa and Sharon 2003, fig. 5: 2, 5を，3はBriend and Humbert 1980, pl. 70 : 4を，4はGilboa and Sharon 2003, fig. 3: 5を転載。

第4図　Ohata（ed.）1970, pl. 1を加工。

第5図　天理参考館提供の実測図をもとに筆者が作成。

第6図　天理参考館提供の実測図をもとに筆者が作成。17はOhata, K.（ed.）1966, pl. VII: 1を，21はOhata, K.（ed.）1966, pl. VI: 7で発表されている資料。

第 7 図　天理参考館提供の実測図をもとに筆者が作成。
第 8 図　天理参考館提供の実測図をもとに作成。1 は Ohata（ed.）1966, pl. VII: 3，2 は Ohata（ed.）1966, pl. VII: 2，15-18 は宮崎 2003，図 2: 7, 4, 8, 6 を転載。
第 9 図　天理参考館提供の実測図をもとに作成。9 は宮崎 2003，図 2: 10 を転載。
第 10 図 天理参考館提供の実測図をもとに作成。
第 11 図 出版に向けて整理中の図版資料などをもとに筆者が作成。

引用文献

Amiran, R. 1969 *Ancient Pottery of Holy Land*. Jerusalem, Rutgers Univ. Press.

Aston, D. A. 1996 *Egyptian Pottery of the late New Kingdom and the Third Intermediate Period*. Studien zur Geschichte und Archäologie Altägyptens 13. Heidelberg.

Aston, D. A. 1998 *Die Keramik des Grabungsplatzes Q I Teil I: Corpus of fabrics, wares and shapes, forschungen in der Rameses-Stadt*. Die Grabungen des Pelizqeus Museums Hildesheim in Qantir-Pi-Ramesse I. Mainz.

Aston, D. A. 1999 *Elephantine XIX: pottery from the Late New Kingdom to the Early Ptolemaic Period*. Archäologische Veröffentlichungen 95. Mainz.

Aston, D. A. 2001 The pottery from H/VI Süd Strata a and b: Preliminary Report. *Ägypten und Levante* 11, pp. 167-196.

Anderson, W. P. 1979 A Stratigraphic and Ceramic Analysis of the Late Bronze and Iron Age Strata of Sounding Y at Sarepta (Srafand, Lebanon). Ph. D. Dissertation. University of Pennsylvania.

Anderson, W. P. 1988 *Sarepta I: The Late Bronze and Early Iron Age Strata of Area II*. Beirut.

Balensi, I. 1980 *Les Fouilles de R. W. Hamilton a Tell Abu Hawam, niveaux IV et V*. Ph. D. Dissertation. Université Des Sciences Humaines. Strasbourg.

Barako, T. J. 2000 The Philistine settlement as mercantile phenomenon. *American Journal of Archaeology* 104, pp. 513-530.

Barako, T. J. 2007 *Tel Mor: the Moshe Dothan Excavations*, 1959-1960. IAA Reports 32. Israel Jerusalem, Antiquities Authority.

Beck, P. and M. Kochavi 1985 A dated assemblage of the late 13th century B.C.E. from the Egyptian Residency at Apfek. *Tel Aviv* 12, pp. 29-42.

Ben-Tor, A., Bonfil, R., Garfinkel, Y., Greenberg, R., Maeir, A. and M. Mazar 1997 *Hazor V: An Acount of the Fifth Season of Excavations 1968*. Jerusalem, Israel Exploration Sosiety and Hebrew University of Jerusalem.

Bikai, P. M. 1978 *The Pottery of Tyre*. Warminster, Aris & Phillips Ltd.

Bounni, A., Lagarce, E. and N. Saliby 1978 Rapport préliminarie sur la dèuxieme campagne de fouilles (1976) à Ibn Hani (Syria). *Syria* 55, pp. 233-301.

Bounni, A., Lagarce, E. and N. Saliby1979 Rapport préliminarie sur la troisième campagne de fouilles (1977) à Ibn Hani (Syria). *Syria* 56, pp. 217-291.

Briend, J. and J. B. Humbert 1980 *Tell Keisan (1971-1976) : une Cité Phénicienne en Galilee*. Paris and Fribourg.

Bunimovitz, S. 1990 Problems in the 'ethnic' identification of the Philistine material culture. *Tel Aviv* 17, pp. 210-222.

Bunimovitz, S. 1995 On the edge of empires – Late Bronze Age (1500-1200 BCE). In T. E. Levy (ed.) *The Archaeology of Society in the Holy Land*. London, Leicester University Press, pp. 320-331.

Bunimovitz, S. and A. Faust 2001 Chronological separation, geographical seregation or ethnic demarcation ? ethinography and the Iton Age low chlonology. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 322, pp. 1-10.

Bunimovitz, S. and A. Yasur-Landau 1996 Philistine and Israelite pottery: A comparative approach to the question of

pots and people. *Tel Aviv* 23, pp. 88-101.

Burdajewicz, M. 1994 *La Céramique Palestinienne du Fer I - La Contribution de Tel Keisan, Site de la Galilée Maritime*. Ph. D. Dissertation. Warsaw University.

Dorsey, D. A. 1991 *The Roads and Highways of Ancient Israel*. Baltimore and London.

Dothan, M. 1989 Archaeological evidence for movements of the early "Sea People" in Canaan. In Gitin, S. and W. G. Dever (eds.) *Recent Excavation in Israel: Studies in Iron Age Archaeology*. Annual of American Schools of Oriental Research 49. Winona Lake, pp. 59-70.

Dothan, M. and Y. Porath 1982 *Ashdod IV*. 'Atiqot 15. Jerusalem, Israel Antiquities Authority.

Dothan, M. and Y. Porath 1993 *Ashdod V*. 'Atiqot 23. Jerusalem, Israel Antiquities Authority.

Dothan, T. 1982 *The Philistines and Their Material Culture*. New Haven and London, Yale University Press.

Dothan, T. 1998 Initial Philistine settlement: From migration to coexistence. In Gitin, S., Mazar, A. and E. Stern (eds.) *Mediterranean Peoples in Transition, Thirteenth to Early Tenth Centuries BCE*., Jerusalem, Israel Exploration Society, pp. 148-161.

Dothan, T. 2000 Reflection on the initial phase of Philistine settlement. In Oren, E. D. (ed.) *The Sea Peoples and Their World: A Reassessment*. Philadelphia, pp. 145-158.

Dothan, T. and M. Dothan 1992 *People of the Sea: The Search for the Philistines*. New York, Macmillan.

Dothan, T. and Zukerman, A. 2004 A preliminary study of the Mycenaean IIIC: 1 pottery assemblages from Tel Miqne-Ekron and Ashdod. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 333, pp. 1-54.

Faust, A. 2006 *Israel's Ethnogenesis: Settlement, Interaction, Expansion and Rsistance*. London, Equinox.

Finkelstein, I. 1986 *Izbet Sarutah: An Early Iron Age Site near Rosh Ha'ayin, Israel*. BAR International Series 299. Oxford.

Finkelstein, I. 1988 *The Archaeology of the Israelite Settlement*. Jerusalem, Israel Exploration Society.

Finkelstein, I. 1995 The date of the Philistine settlement in Canaan. *Tel Aviv* 22, pp. 213-239.

Finkelstein, I. 1996 The territorial-political system of Canaan in the Late Bronze Age. *Ugarit-Forschungen* 28, pp. 221-255.

Finkelstein, I. 2000 The Philistine settlements: When, where and how many. In Oren, E. (ed.) *The Sea Peoples and Their World: A Reassessment*. Philadelphia, pp. 159-180.

Finkelstein I. and O. Zinahoni 2000 The pottery from the Late Bronze gate. In Finkelstein, I., Ussishitin, D. and B. Halpern (eds.) *Megiddo III: The 1992-1996 Seasons*. Tel Aviv, Tel Aviv University, pp. 223-243.

Finkelstein I., Zinahoni, O. and A. Kafri 2000 The Iron Age pottery assemblages from areas F, K and H and their stratigraphic and chronological implications. In Finkelstein, I., Ussishitin, D. and B. Halpern (eds.) *Megiddo III: The 1992-1996 Seasons*. Tel Aviv, Tel Aviv University, pp. 244-324.

Finkelstein, I. and N. Na'aman1994 *From Nomadism to the Monarchy: Archaeological and Historical Aspects of Early Israel*. Jerusalem, Israel Exploration Society.

Flankel, R. 1994 Upper Galilee in the Late Bronze-Iron Age transition. In Finkelstein, I. and N. Na'aman (eds.) *From Nomadism to the Monarchy: Archaeological and Historical Aspects of Early Israel*. Jerusalem, pp.18-34.

Furumark, A. 1941 *The Mycenaean Pottery: Analysis and Classification*. Stockholm.

Gadot, Y. 2003 *Continuity and Change: Cultural Processes in Late Bronze and Early Iron Ages in Israel's Central Coastal Plain*. Ph. D. Dissertation. Tel Aviv University.

Gadot, Y. 2006 Aphek in the Sharon and Philistine northern frontier. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 341, pp. 21-36.

Gilboa, A. 1998 Iron I-IIA pottery evolution at Dor: Regional contexts and Cypriot connection. In Gitin, S., Mazar, A. and E. Stern (eds.) *Mediterranean Peoples in Transition, Thirteenth to Early Tenth Centuries BCE*. Jerusalem, Israel Exploration Society, pp. 413-425.

Gilboa, A. 2001a The significance of Iron Age "Wavy-Band Pithoi" along the Syro-Palestinian littoral, with reference to Tel Dor pithoi, In Wolff, S. R. (ed.) *Studies in Archaeology of Israel and Neighboring Lands in*

Memory of Douglas L. Esse. Studies in Ancient Oriental Civilization 59. ASOR Books 5. Chicago, pp.163-173.

Gilboa, A. 2001b *Southern Phoenicia during the Iron Age I-IIA in the light of the Tel Dor excavations: The evidence of pottery.* Ph. D. Dissertation. The Hebrew University of Jerusalem.

Gilboa, A. 2005 Sea Peoples and Phoenicians along the southern Phoenician coast –a reconciliation: an interpretation of Šikila (SKL) material culture. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 337, pp. 47-78.

Gilboa, A., Cohen-Weinberger, A. and Y. Goren 2006 Philistine bichrome pottery, the view from the northern Canaanite coast: Notes on provenience and symbolic properties. In de Miroschedji, P. and A. Maier (eds.) *" I Will Speak the Riddles of Ancient Times": Archaeological and Historical Studies in Honor of Amihai Mazar on the Occasion of His Sixtieth Birthday.* Winona Lake, Eisenbrauns, pp. 303-343.

Gilboa, A. and I. Sharon 2003 An archaeological contribution to the early Iron Age chronological debate: Alternative chronology for the Phoenicia and their effects on the Levant, Cyprus and Greece. *Bulletin on the American Schools of Oriental Research* 332, pp. 7-80.

Goren, Y., Finkelstein I. and N. Na'aman 2004 *Inscribed in Clay: Provinence Study of the Amarna Tablets and Other Ancient Near Eastern Texts.* Tel Aviv, Tel Aviv University.

Guy, P. L. O. 1938 *Megiddo Tombs.* Oriental Institute Publications 33. Chicago, The University of Chicago Press.

Herzog, Z. 2008 Jaffa. In Stern, E. (ed.) *The New Encyclopedia of Archaeological Excavations in the Holy Land* 5. Jerusalem, Israel Exploration Society, pp. 1791-1792.

Harrison, T. P. 2004 *Megiddo 3 : Final Report on the Stratum VI Excavations.* Oriental Institute Publication 127. Chicago.

Iran, D. 1999 *Northearstern Israel in the Iron Age I: Cultural, socioeconomic and political perspectives.* Ph. D. Dissertation. Tel Aviv University.

Karageorghis, V., Coldstream, J. N., Bikai, P. M., Johnston, A. W., Robertson, M. and L. Jehasse 1981 *Excavation at Kition IV: The Non-Cypriot Pottery.* Nicosia, The Department of Antiquities, Cyprus.

Karageorghis, V. and M. Demas 1988 *Excavation at Maa-Paleokastro 1979-1986.* Nicosia, The Department of Antiquities, Cyprus.

Karmon, Y. 1971 *Israel: A Regional Geography.* London, Wiley Interscience.

Killebrew, A. E. 2000 Aegean-style early Philistine pottery in Canaan during the Iron Age I: The stylistic analysis of the MycenaeanIIIC:1b pottery and its associated wares. In Oren, E. D. (ed.) *The Sea Peoples and Their World: A Reassessment.* Philadelphia, University Museum, University of Pennsylvania, pp. 255-280.

Killebrew, A. E. 2005a Cultural homogenization and diversity in Canaan during the 13th and 12th centuries BC. In Clarke, J. (ed.) *Archaeological Perspectives on the Transition and Transformation of Culture in the Eastern Mediterranean.* Levant Supplementary 2. Oxford, Oxbow books.

Killebrew, A. E. 2005b *Biblical Peoples and Ethnicity: An Archaeological Study of Egyptians, Canaanites, Philistines and Early Israel, 1300-1100 B.C.E.* Leiden, Brill.

Kitchen, K. A. 2000 Regional and genealogical date of ancient Egypt (Absolute Chronology I): The historical chronology of ancient Egypt, a current assessment. In Bietak, M. (ed.) *The Synchronisation of Civilizations in the Eastern Mediterranean in Second Millennium B. C.* Denkschriften der Gesamtakademie 19, pp. 39-52.

Kochavi, M. 1993 Zeror, Tel. In Stern, E. (ed.) *The New Encyclopedia of Archaeological Excavations in the Holy Land* 4. New York, Israel Exploration Society and Simon and Schuster, pp. 1524-1526.

Loud, G. 1948 *Megiddo II: Seasons of 1935-39.* Oriental Institute Publications 62. Chicago, The University of Chicago Press.

Mountjoy, P. A. 1986 *Mycenaean Decorated Pottery: A Guide to Identification.* Göteborg, Oxbow books.

Mazar, A. 1980 *Excavations at Tell Qasile part 1.* Qedem 12. Jerusalem.

Mazar, A.1985a *Excavations at Tell Oasile part 2.* Qedem 20. Jerusalem.

Mazar, A.1985b The emergence of the Philistine material culture. *Israel Exploration Journal* 35, pp. 95-107.

Mazar, A.1990 *Archaeology of the Land of the Bible 10,000-586 B.C.E.* New York, Doubleday.

Mazar, A.1933 Beth-Shean: Tel Beth-Shean and the northen cemetary. In Stern, E. (ed.) *The New Encyclopedia of Archaeological Excavations in the Holy Land.* New York, Israel Exploration Society and Simon and Schuster, pp. 214-223.

Mazar, A.1994 Jerusalem and its vicinity in Iron Age I. In Finkelstein, I. and N. Na'aman (eds.) *From Nomadism to the Monarchy: Archaeological and Historical Aspects of Early Israel.* Jerusalem, Israel Exploration Society, pp. 70-91.

Mazar, A.1997 Iron Age chronology: A reply to I. Finkelstein. *Levant* 29, pp. 157-167.

Mazar, A.1998 On the appearance of red slip in the Iron Age I period in Israel. In Gitin, S., Mazar, A. and E. Stern (eds.) *Mediterranean Peoples in Transition, Thirteenth to Early Tenth Centuries BCE.* Jerusalem, Israel Exploration Society, pp. 368-378.

Mazar, A.2000 The temple and cult of Philistines. In Oren, E. D. (ed.) *The Sea Peoples and Their World: A Reassessment.* Philadelphia, University Museum, University of Pennsylvania, pp. 215-232.

Mazar, A. (ed.) 2006 *Excavation at Tel Beth-Shean 1989-1996 Volume I: From the Late Bronze Age IIB to the Medieval Period.* Jerusalem, The Israel Exploration Society.

Mazar, A. and R. Mullins (eds.) 2007 *Excavation at Tel Beth-Shean 1989-1996 Volume II:The Middle and Late Bronze Age Strata in Area R.* Jerusalem, The Israel Exploration Society.

Metzger, M. 1993 Kāmid el-Lōz 8: *Die Spätbronzezeitlichen Tempelanlagen. Die Kleinfunde.* Tafeln. Saarbrücker Beiträge zur Altertumskunde 40. Bonn.

Ohata, K. (ed.) 1966 *Tel Zeror I.* The Society for Near Eastern Studies in Japan. Tokyo.

Ohata, K. (ed.) 1967 *Tel Zeror II.* The Society for Near Eastern Studies in Japan. Tokyo.

Ohata, K. (ed.) 1970 *Tel Zeror III.* The Society for Near Eastern Studies in Japan. Tokyo.

Owen, D. 1981 An Akkadian letter from Ugarit at Tel Aphek. *Tel Aviv* 8, pp. 1-17.

Porath, Y., Yannai, E. and A. Kasher 1999 Archaeological remains at Jatt. *'Atiqot* 37. Jerusalem, pp. 1-78.

Prichard, J. B. 1980 *The Cemetery at Tell es-Sa'idiyeh, Jordan.* University Museum Monograph 41. Philadelphia.

Raban, A. 2001 Standardized collared-rim pithoi and short-lived Settlement. In Wolff, S. R. (ed.) *Studies in Archaeology of Israel and Neighboring Lands in Memory of Douglas L. Esse.* Studies in ancient oriental civilization 59. ASOR Books 5. Chicago, pp.493-516.

Redford, D. B. 1992 *Egypt, Canaan, and Israel in Ancient Times.* Prinston University Press, Prinston.

Redford, D. B. 2007 Egypt and the Levant. In Wilkinson, T. (ed.) *The Egyptian World.* London and New York.

Sherratt, E. S. 1998 "Sea Peoples" and the economic structure of the late second Millennium in the eastern Mediterranean. In Gitin, S., Mazar, A. and E. Stern (eds.) *Mediterranean Peoples in Transition, Thirteenth to Early Tenth Centuries BCE.* Jerusalem, Israel Exploration Society, pp. 292-313.

Singer, I. 1983 Takuhlinu and Haya: two Governors in the Ugarit Letter from Tel Aphek. *Tel Aviv* 10, pp. 3-25.

Singer, I. 1994 Egyptian, Canaanite and Philistine in the periods of the settlement and Judges. In Finkelstein, I. and N. Na'aman (eds.) *From Nomadism to The monarchy: Archaeological and Historical Aspects of Early Israel.* Jerusalem, pp. 282-338.

Stager, L. E. 1995 The impact of the Sea Peoples in Canaan (1185-1050). In Levy, T. E. (ed.) *The Archaeology of Society in the Holy Land.* New York, Facts On Files, pp. 332-348.

Stern, E. 1978 *Excavation at Tel Mevorakh part one: from the Iron Age to the Roman Age.* Qedem 9. Jerusalem.

Stern, E. 2000 The settlement of Sea Peoples in northern Israel. In Oren, E. D. (ed.) *The Sea Peoples and Their World: A Reassessment.* Philadelphia, University Museum, University of Pennsylvania, pp. 197-212.

The Society for The Near Eastern Studies in Japan 1974 *The Tel Zeror Excavation.* Tokyo.

Ussishkin, D. 1985 Levels VII and VI at Tel Lachish and the end of the Late Bronze Age in Canaan. In J.N. Tubb, J.

N. (ed.) *Palestine in the Bronze and Iron Ages, Papers in Honour of Olga Tufnell*. London, pp. 213-230.
Yadin, Y. et al. 1958 *Hazor I*. Jerusalem, Magnes Press and Hebrew University of Jerusalem.
Yadin, Y. et al.1960 *Hazor II*. Jerusalem, Magnes Press and Hebrew University of Jerusalem.
Yadin, Y. et al.1961 *HazorIII-IV*. Jerusalem, Magnes Press and Hebrew University of Jerusalem.
Yannai, E. 2000 A Late Bronze Age tomb at Jatt. *'Atiqot* 39. Jerusalem, pp. 49-82.
宮崎修二 2003「テル・ゼロールと海の民ーその関連づけの正否について」『オリエント』46-1, 57-82 頁 .
小川英雄 1989『イスラエル考古学研究』 東京 山本書店 .
天理大学文学部考古学・民俗学研究室, 天理大学付属天理参考館考古美術室編 2005『東地中海沿岸の古代遺跡 テル・ゼロールの出土遺物 - 墓地編 -』天理大学 .

Sharon plain, Israel in the Iron Age I: a view from Tel Zeror materials

ONOZUKA, Takuzo

In previous historical and archaeological research, the Sharon plain has been regarded as belonging to the territory of the Sea People during the Iron Age I. This view, derived from Egyptian historical sources, still carries much weight as background to archaeological investigation in the area. Scholars have focused their attention on specific artifacts found in small quantities, such as "Philistine" ware, to argue the relationship shared by the Sharon plain and the Sea Peoples. However, examination of new archaeological data from excavations carried out in the Sharon plain has begun only recently. Tel Zeror, located in the center of Sharon plain, may be one key site with regard to this issue, along with Tel Dor and Tel Aphek, since Tel Zeror shows a stratigraphical sequence from the Late Bronze Age and the Iron Age I. However, most of Tel Zeror materials have not yet been published. Therefore, this article aims to demonstrate the cultural transition taking place during the Iron Age I and explain its background based on pottery evidence from Tel Zeror excavations. As a result of the analysis, it is most probable that Tel Zeror and the northern part of Sharon plain were under the control of the Egyptian New Kingdom from the Late Bronze Age IIB to the Iron Age IA. For the most part, Iron Age IB pottery from Tel Zeror shows Late Bronze tradition, though some Aegean style ware also appears in small quantities. The pattern of material culture here is different from that of the southern coastal plain where Philistines settled down and is similar to the material culture of the southern Phoenician coast. The background to this cultural formation is considered at the end of the article.